

「海の民ふたがみ」第4号 豊後森特集 2002/4/21

巻頭言 二神島調査で し残した事  
神奈川大学日本常民文化研究所所長 橘川俊忠

大分県玖珠町学習交流会記念講1 2002年9月9日  
「豊後森二神氏の400年」  
玖珠郡史談会 竹野孝一郎

シリーズ

二神氏ゆかりの地を訪ねて 常任理事 豊田渉  
大分県玖珠町森 事務局  
大分県竹田市  
山口県東和町

二神古文書の解説 神奈川大学日本常民文化研究所  
大分県玖珠町森 関口博巨  
事務局

系譜家紋紹介  
大分県玖珠町森 事務局

二神氏と苗字の歴史  
大分県玖珠町森 事務局

二神氏人物伝(画人)

二神種亮(栗舎) 会長 二神浩三  
西岡種憲(園月) 愛媛女流美術家協会会員 西岡関  
二神常貞 二神浩三  
二神司朗 中田和邦

会員さんからの便り

南国宮崎よりこんにちは 宮崎市 二神光次  
緑あって…… 尾張旭市 二神陽子

修理進のその後 理事 二神信也

尋ね人

役員をつぶやき

手提げ提灯 二神俊一  
笑う門には福が来る 二神宏介  
皆様と共に考えたい 二神末次未  
私と城辺 二神久蔵  
世界の京都の二神町は！ 二神成幸

## 二神島調査で し残したこと

常民文化研究所所長 橘川 俊忠



神奈川県立常民文化研究所が、二神島の調査に入ってから、早いもので十年近くの歳月が経過した。神奈川県立に研究所が移管される前の時代にさかのぼれば、四十年以上にもなる。この間、二神家の人々や二神島の住民の方々に大変な迷惑をおかけしただけではなく、一方ならぬお世話にもなった。文書調査・家屋調査・墓地調査と一通りの調査を行ない、ビデオの作成も行なった。二神島の調査は昨年あたりで、そろそろ終わりにかかるところにきたと思っていた。

しかし、まだやりのこしたことがあるのではないかという感じもしていた。それぞれの調査は、それなりの成果はあげたし、ビデオもそれなりに喜んでもらえたようだし、二神一族のことは二神会に任せておけばよいだろう。わざわざ横浜から通ってくることもないだろうと思う一方で、これでいいのかなという思いがどうしても捨てきれない。

考えてみれば、二神島の調査は、海の視点から日本の歴史や文化・社会を見直そうと言うことで始まった。その目的は達成されたのか。史料を採集し、研究論文を書き、学会に向けて発表する。それだけの調査であってはならない。資料を持ち伝えてきた人々にお返しするものをなにか提示しなければならない。はたして、それができたのか。第一、海の民としての二神一族や二神島の人々の暮らしや文化の歴史を調べ尽くしたのか。調査はそれなりに進展したが、かえって新しい疑問が湧いてきたのではないか。などなど、調査を締めくくろうという意志とは反対に、問題点が次から次へと思ひ浮かぶ。

これは、やるしかないか。研究費はどうしよう。どういう態勢を作ったらいいか。どういう方法で新しい課題に取り組もうか。解決しなければならない問題は山積みであるが、やると決めたらなんとかするしかない。ということで、とりあえず、2002年度の科学研究費を申請することにし、民俗学のスタッフも加えて、新しい態勢を作ることにした。科学研究費が取れるかどうかは分からないが、とにかく調査・研究を継続する方向で努力をすることだけは確認した。またまた、迷惑をおかけすることになるかもしれないけれど、ご協力をお願いしたい。

それにしても、二神会の方々のパワーには圧倒される。豊後森での会に参加して、ますます逃げ切れないという思いを抱かされてしまった。二神会が、「海民」のパワーと自由さを失わない限り、息長くお付き合いをさせていただこう。会の皆さん、そんなことなので今後とも宜しく申し上げます。

## 「豊後森二神氏の400年」

玖珠史談会 竹野 孝一郎

2001年9月9日

大分県玖珠町「望山荘」で開催の  
「二神氏学習交流会」の講演内



### はじめに

みなさんこんにちは。きょうは、遠いところを、玖珠へようこそお出で下さいました。私は、玖珠郡史談会の竹野でございます。

今年の4月には、二神氏の系譜研究会から伊予の方へお招きを頂きまして、大変光栄に思っております。実を申しますと、私は、四国へ足をふみいれましたのは、今回が初めてでございまして、かねてから来島氏や二神氏などの活躍した伊予にいつか行ってみたいという気持ちはあったんですが、皆様方にお招きを頂きまして、やっと重い腰をあげたような訳でございます。

いつも見慣れておりますこの玖珠の盆地とは大分ちがった風景で、北条市のふるさと館の展望室から周囲をみわたしますと、皆様方のこころの故郷であります二神島や近くでは鹿島城・恵良山など、何かここに始めて立ったのではなく、以前にも来たことがあるような、そんな錯覚をいたしました。

二神重則さんには、総会終了後、片山二神氏の墓地や善応寺などを車で案内していただきまして、ほんとうに感謝いたしております。ここが

二神修理進や二神伝兵衛の故郷なんだと思いますと、何か感慨深いものがありました。

また、7月15・16日と当会の顧問であります福川先生に誘われまして、豊田町へも行ってまいりました。元教育長の田中鑛蔵先生・豊田町教育委員会の課長さんに案内をしていただき、神上寺の方へ参りまして、豊田輔長の子息輔平が寄進したという聖観音像や、神上寺に伝わります古文書などを拝見することができました。

その後、豊田種長追善供養碑や豊田氏の館跡などをまわりまして、今年は豊田・二神氏と大きく関わりの深い年になったな、と思っております。

## 1 二神文書との出会い

私と大分市府内町の林四郎さんが所蔵されております「二神家文書」との出会いは、もう18年も前のことになります。私と同じく玖珠郡史談会の理事であります甲斐素純さんが、この「二神家文書」の所在を知ったのは、元九重町の教育委員長をされておりました小幡鉄也さんからでした。小幡さんは、昭和49年に元小学校の教諭をしておられた大塚富吉さんから二神文書の所在を知り、その後林さんの家を度々訪ね調査をされておりました。

小幡さんと二神氏との関係は、小幡さんの祖父であります橋爪政五郎さんは、実は二神家の出で、明治の始めに九重町野上の橋爪家に養子に入っております。

このような経緯から小幡さんの紹介によって、昭和58年の夏に、私と甲斐さんで林さんのお家におじゃまをいたしまして、文書を拝見させていただき写真におさめることができました。

その後、小幡さんから当時森町に住んでおられた橋爪正さんが所蔵されている「橋爪・二神系図」の所在も御教示いただきました。さらに玖珠町の得能年国さんの所蔵されています「得能・二神系図」を拝見する機会も得まして、おぼろげながら二神氏のことになってまいりました。

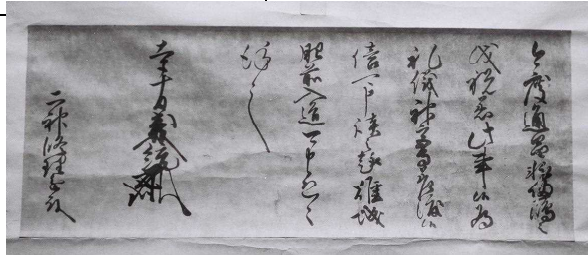
時を前後して、このような一連の資料を調査させていただく機会に恵まれて、翌年の昭和59年9月に、私が『玖珠郡史談』第12号に「大分市府内町林四郎氏所蔵二神文書および二神系図について」と題しまして、中世の二神文書1点と二神系図1本を発表させていただきました。

林家に1点伝存しております「大友義統書状」は、『愛媛県史』資料編古代・中世に所収されております

二神氏文書案  
片山二神文書

今度通昌輒歸嶋之儀、  
祝着此事迄候、為祝儀神  
宮寺併可申談之趣、  
雄城肥前入道可申也、  
恐々謹言  
(天正十二年)  
十一月十日義統

二神修理進殿



の原本である、ということが判明しまして、片山二神氏の一派がこの玖珠にきたことが判りました。

そして翌60年12月には、甲斐素純さんが『史談』第15号に「豊後森藩政史についての一考察～二神文書を中心として～」と題して、「近世二神文書」・「得能二神系図」、そして「橋爪二神系図」の紹介をいたしました。伊予でも申しましたように、1通の文書によって18年経った今、こうして皆様方と交流させて頂く事ができようとは、その当時は、夢にも思っておりませんでした。

今日は、「豊後森二神氏の400年」ということでお話をさせていただき訳でございますが、その後玖珠の方では二神氏に関して新しい史料が発見されておりませんので、特別変わったお話もできませんので、皆様方には大変申し訳なく思っております。

当初の予定では、レジメにもありますように、来島氏の玖珠郡入部からお話をさせていただこうと思っておりましたが、昨夜の交流会の席で、事務局長の二神英臣さんから得能二神の「先祖書」のコピーを頂きまして、急遽このことについてお話をと思いましたので、2)の「旧記集」の中の二神氏からお話を進めてまいりたいと思います。得能二神氏につきましては、4番目の豊後二神氏の消長というところで触れさせて頂き

たいと思います。

## 2) 「旧記集」の中の二神氏～藩政初期の二神氏～

『旧記集』と申しますのは、三代藩主久留島通清が田坂・大林・浅川・二神等の譜代重臣に命じて、森藩成立当初の事蹟を書き上げさせたものを編集して、『旧記集』と名付けたものであります。

そこで、この『旧記集』によって、関が原以後康親に従って玖珠へ来た二神氏について見てみることにします。

資料2を見てください。これは『旧記集』の中から二神氏の名前がみえる関係箇所のみを抜粋したものです。内容はいずれも長文ですので、一部だけ抜粋しましたので、分かりにくいかとは思いますが、お許しください。

資料  
2

①瑞雲院様江田坂道関ヨリ指上候書付写

(前略)

一 与州にて加藤左馬介殿御城へ毛利殿より野島殿へ仰せ付けられ、与州のはままで参られ候由左馬殿留守居衆よりみつの町人共へ樽を持たせ野島殿御舟着き申し候て右の樽を持ち参りこれまで御出忝奉存候、何方へも御手引きを仕るべき由申上げ候舟ありの儀に御座候へば上下共に乱酒仕りさんざん給酔い申し、折り節北の方に火をかけ左馬殿衆かけ付け野島殿衆討ちはたし野島衆何とも仕るべき様もこれ無きに付てかざはやつづきや殿御出にてこの度の儀に御座候間加勢頼み申し候に付て江川三郎兵衛・二神又兵衛人数百ばかり召つれ殿様の御のぼり三本左馬殿方へ立て置き申し候に付て左馬殿人数参り申さず中国打ちもらされ衆舟にのせ中国へ渡り申し候、(以下略)

(中略)

久留島殿(以下破損)

仰せられ候嶋申す侍衆長はまへ参られ候てさと殿より御ふち方遣わされるべき由御意成され候、瑞庵は上方へまかり上り右の次第申上げ候わんとてともまて参り候へとも上方大かた相済み申す様に聞こえ申すに付て国へ罷り下がり候事、(以下略)

資料2の①は、慶長5年9月の関が原の戦いの状況を書いた部分ですが、この中に二神又兵衛と瑞庵という二神氏がでてまいります。資料3の「玖珠二神氏略系図」をご覧ください。この両名は玖珠の「二神系図」によりますと、二神隼人佐通範の孫とひ孫に当たります。

二神瑞庵は改めて申し上げるまでもありませんが、二神修理進で片山二神文書の修理進その人であります。修理進については後でふれたいと思います。系図の一番上に又兵衛親子の名がみえます。後に久留島氏の苗字を拝領して家老職となる吉住家の「先祖書」に、「その頃（文禄・慶長の役）勘左衛門・吉松市右衛門・二神官兵衛三人連名で、節巖院様（通総）よりの御書所持仕候」、とあり、この二神官兵衛が又兵衛種弘の父か祖父にあたる人物であると思います。

又兵衛は、親子共に又兵衛を名乗っていますが、①の史料の二神又兵衛は父親の種弘と思われる。それは、資料2の③に二神左馬進という人がでてまいります。この左馬進は又兵衛種弘の子の種慶で、父又兵衛の死後又兵衛を名乗ったと思われ、資料2の⑤に再び又兵衛の名を見ることができます。仮名や官途などは、世襲されることが多いので、ほぼまちがいないと思われ。

資料2の②は、関が原の戦いの後、来島康親が浪々の身となり、お家再興を図るため、伏見に移り、世間の風説を探る内に、近江国佐和山の井伊直政に頼むことになり、井伊兵部の指図によって二神慶用・二神利三の両名に御目見へを許したが体よく断られた、という場面です。ここに出てまいります二神慶用と二神利三の両名は、玖珠の「二神系図」にはその名がないので、今のところどの系譜に入るのかは分かりません。

② 大林浄真前多兵衛事覚書写

一 伊井の兵部殿大夫様御指図にてこの方の二神慶用又は利三と申す兩人には御目見へを御させ成され候、その後伊井兵部殿御煩いと申し近江の佐和山へ御引籠り成され候て右の俣にて御座候故、是非に及ばず仕合にて御座候事

一 右衛門市様・大方様（通総室）  
・高田四郎右衛門・利三・浅川六助皆々へ我等申し様は御知行の事はすたり申し候、

（以下略）

慶安六年正月五日

大林浄真  
大林善右衛門殿

資料2の②



③ 大守公（通春） 御先祖有増覚  
 （中 略）  
 一 又国の御屋敷に二神左馬進と申し  
 候者の屋敷加わり勢溜加り今は長右衛  
 門屋敷に藤四郎元屋敷善之進屋敷八郎  
 左衛門屋敷相加わり大分にまかり成り  
 候事

資料2の③

資料2の③は、来島氏が日田・玖珠・速見郡の内に14000石を得て入部して後、江戸や豊後森に家臣の屋敷が整備されていく様子が述べられています。森に二神左馬進の屋敷が新たに加わった様子が書かれています。左馬進は①でみた又兵衛の子で、後又兵衛を名乗っていることは、先程お話いたしました通りであります。

④ 島内蔵之承覚書之写  
 一 辻間村庄屋彦三郎御討果てに付、その子共京にて目安差上申し候、この儀京にて埒明  
 き申さず候故江戸にて御裁許遊ばされ候、就夫府内御目付衆へ仰せ付けられ候か辻間  
 村百姓鍛冶屋肝煎二人を江戸へ御召しに付、府内より森へ飛脚参り候、右の条々  
 江川  
 喜左衛門能存じ候たる故彼百姓共召し連れ江戸へ参り候へと二神監物を使いにて浅川六助・二神長右衛門より申し付けられ候へ共喜左衛門色々申し分仕り参り間敷くの由申し候、（中 略）  
 参り候へは先様に二神五左衛門・田坂清左衛門居り申し五左衛門申し候は今少し遅く候へは清左衛門成り共江戸へ遣わすべくと存じ候

資料2の④

資料2の④は、久留島通春の領地の百姓・町人が藩主通春や家老島内蔵之丞・吉住惣兵衛の悪政に対して、寛永15・16年頃、豊後の府内目付に対して「目安書」を提出し、その中に「丹波殿国替被仰付候か、又は如何様にも上々より御意なしくだし候へかし」とあるように、府内目付に久留島氏の国替えと上からのお仕置き・処罰を願い出ています。

通春は気性が荒く、家老の村上主水を追い出し、江戸家老の二神伝兵衛（種親）を座敷牢に入れ、島内蔵之丞・吉住惣兵衛を家老にし、両名によってしたい放題のことをしている、などを訴え、それに対する返答がなければ、島原の一揆のように通春の屋敷へ押しかけ内蔵之丞・惣兵衛両名のいけ首をぬき獄門に上げ、その上で百姓・町人は男女によらず腹を切ると訴えている。④はこの一連のことにからむもので、二神長右衛門・二神監物、二神五左衛門の名が見えます。

二神長右衛門之慶と監物之房は親子でありまして、之慶は二神伝兵衛種房の二男左馬進著弘（あきひろ・つぐひろ）の長男です。二神伝兵衛は伊予の史料では、天文12年（1567）頃とする村上通康や通康家臣連署書状にでてくる二神田兵衛種則と同一人物と思われます。このことは、二神修理進と同じく風早の二神氏の系統が玖珠に来たといえます。

二神五左衛門は長右衛門の弟で、2代藩主通春の時代に分家して一家をたてています。

資料2の⑤は、元和6年に大坂城普請で、家老二神古長右衛門（之慶）と島与左衛門両名が普請奉行を努めたこと、又元和10年（寛永元年）に通春が領内日田の知行廻りをした際、お供した面々の姓名が記されています。二神古長右衛門・二神喜内・二神又兵衛・二神治右衛門の4名の二神氏の名が見えます。この内、二神又兵衛と治右衛門は共に日田代官とあります。

二神古長右衛門の「古」というのは「先の」という意味で、長右衛門之慶をさします。二神喜内は玖珠二神系図では該当者が見当たりません。又兵衛は先に見た左馬進でして、治右衛門は伝兵衛種房の三男種世の子で次右衛門種広でありましょう。

⑤朝山堯書留書之内左之通

一 元和六年庚申年大坂御城御普請御座候、御手伝い遊ばされ家老二神古長右衛門（之慶）・鳥与左衛門御普請奉行仕事

（中略）

一 元和十甲子改元寛永に成る、二月大守公御領内日田郡御知行廻り有り、二神古長右衛門・原長兵衛・二神喜内・吉田二郎四郎・鳥官兵衛騎馬にて五騎御供、日田御代官二神又兵衛・田中五郎左衛門・坂田九郎右衛門・二神治右衛門也、

資料2の⑤

『旧記集』の中には名前が見えませんが、「玖珠二神系図」に伝兵衛種房の長男主殿助種吉の名があります。この主殿助は、「片山二神文書」の天正十年六月晦日付け、村上通総から二神修理進宛の「感状」の中に名前を見ることができます。これは、資料4の③にその全文をあげておきました。

二神伝兵衛は豊後の大友氏とも交流があり、大友宗麟書状の中に、「二神田兵衛子兩人の所より云々」という文言があり、田兵衛には少なくとも2人の子があり、一人は主殿助であると思われます。

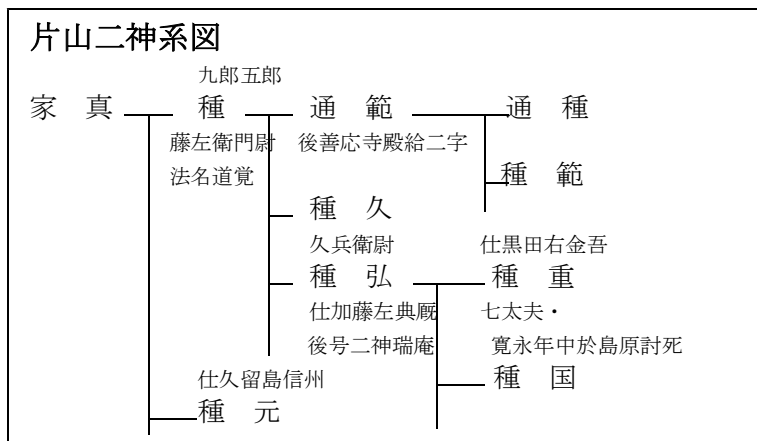
いまお話いたしました二神氏について整理してみたいと思います。玖珠の「二神系図」では、実際に親子関係にあるかどうかは別といたしまして、通範には4人の子があり、長男官兵衛種尉の系統は2の①の資料にでてまいりました二神又兵衛種弘とその子左馬進種慶、次男伝兵衛種房の系統は、種房の次男著弘（つぐひろ・あきひろ）の子長右衛門尉之慶と五左衛門著勝（あきかつ・つぐかつ）で、この兄弟は通春の時代に分家して五左衛門家をたてています。

また種房の三男種世の子治郎右衛門種広の名もみられます。そして通範の三男種春の系統が二神修理進瑞庵で、瑞庵の名は、関が原の戦い以後玖珠の史料ではみられません。これは瑞庵が加藤左馬助に仕えたことによるものでして、「片山二神系図」によっても知ることが出来ます。

このように、来島康親に従って玖珠へ入って来た二神氏は、風早の二神氏でした。その他、二神慶用・利三、二神喜内等系譜的に不明な二神氏もいますが、これらの二神氏もおそらく風早の二神氏の縁に繋がる人々であったろう、と思います。

### 3 林・二神氏について

#### 資料1



では、次に林四郎氏所蔵文書によって、二神修理進瑞庵の系譜に繋がる二神氏についてみたいと思います。資料1は「片山二神系図」と「林二神系図」を比較したものです。二神系図の多くは、二神通範の兄弟について書かれたものではなく、通範の子の系譜的広がりとして書かれているものがほとんどです。玖珠の二神系図もまた、そうです。そういう系図の中にあって「片山二神系図」には通範の兄弟が書かれてありまして、これは大変貴重な系図であろうと思います。この系図によりますと、修理進瑞庵は通範の3番目の弟となっておりますが、玖珠の二神系図では、通範の孫ということになっています。

さて、それでは林家に伝わります天正13年（1585）11月10日付けの二神修理進宛、大友義統書状についてみてみることにします。全文は資料4の①にあげております。書状の内容は、「来島通総が伊予へ帰国したのでその祝儀言上のため大友氏が神宮寺を伊予へ遣わす」というものです。

この書状が二神氏に出された背景ですが、天正9年（1581）の末

頃、安芸国の沿岸では、毛利氏に背いた能島・来島の水軍が攻め寄せて来る、と言う噂が飛び交い、翌年の春になって毛利氏に背いたのは来島氏であるということが分かりました。来島氏は、以前から河野家からの独立を目指しており、中国平定の総大将羽柴秀吉の許へ赴き、織田家に出仕する旨を言上しています。

天正10年に至って小早川・因島・能島の軍勢が来島氏に対して攻撃を仕掛け、通総も応戦したのですが支えきれず、ついに秀吉のもとへ逃れたといえます。その後本能寺の変が起こりまして急遽秀吉と毛利氏は和睦しまして、天正12年10月に秀吉から毛利元清に対して通総の伊予帰国を打診しています。しかし、毛利氏はこれを拒絶しましたが、結局秀吉の意を汲んで通総の帰国を許しました。この二神修理進宛の書状には、こういった背景が含まれております。その後、二神修理進瑞庵は、関が原の役を経まして、加藤左馬助に仕えたことは、先にお話いたしました通りであります。

一方、瑞庵の子七大夫は、いつの頃からかは分かりませんが、子息九大夫とともに、黒田藩に仕えております。七大夫は、天正12年(1584)に来島通総か黒田官兵衛に従って、岸和田城攻めに参戦しています。また、天正14年の夏に、秀吉は九州の平定を決意して、黒田官兵衛を中国軍の軍監として、九州へ出陣しております。

通総も官兵衛に従って、九州に遠征しており、こうした関わりの中から七大夫は、黒田氏の誘いをうけ、黒田氏に仕えたものと思われれます。七大夫は、寛永15年の島原一揆で討死し、九大夫も傷を負っています。この時、七大夫は70歳の高齢でありました。黒田藩の「寛文分限帳」によりますと、九大夫は黒田藩で200石の知行を得ていましたが、それ以後の家臣団名簿には二神氏の名前はなく、黒田藩での二神氏の話は分かりません。

ここで一つ気になりますのが、黒田藩の二神九大夫と、森藩の二神七大夫嘉林(よししげ・よしとき・よしふさ)との関係であります。両者を別人と考えるか、同一人物と考えるかですが、「林二神系図」によりますと、嘉林も島原で傷を負っており、どうも私は同一人物ではないかと考えております。来島氏は島原の乱には参戦しておりませんので、こういうことを総合しますと同一人物であると考えたほうが自然なような気がします。

黒田藩に仕えていた二神九大夫は、寛文年間以後、久留島氏の誘いに応じ黒田家を離れ、豊後森の久留島氏へ仕え、その前後に二神七大夫を名乗ったと考えられるでしょう。

林氏所蔵の二神文書の中で、中世文書一点を除き、一番古いもので天和2年(1682)の文書があり、この文書は二神七大夫嘉林及び子息

勘左衛門嘉鑑への知行宛行状です。資料4の④・⑤をご覧ください。父七大夫への宛行状を見ますと、

知行高五拾石之事、  
為隠居領令扶助畢、  
全可領知者也、  
天和二年十二月晦日  
信濃（花押）  
二神七大夫とのへ

資料4の④

とあります。さらに同日付けで  
子息勘左衛門に対して

宛行知行之事  
高百五拾石者、  
右令扶助畢、  
全令領地者也、  
天和二年十二月晦日  
信濃（花押）

資料4の⑤

とあり、黒田家に仕えた二神九大夫は父七太夫の死後、それも寛文年間以後に「七太夫」を名乗ったと考えられます。その後黒田氏からの誘いがあり、天和2年に豊後森へ来て、親子共々召抱えられたのではないのでしょうか。この時すでに七大夫は高齢で、子息勘左衛門に150石を与え、別に七大夫へは隠居料として50石を与えたものと私は考えております。

しかし、林家には二神氏が黒田家から与えられた知行宛行状などの類や黒田家に関する文書を1点も伝えておりませんので、現段階では推量するばかりであります。

二神勘左衛門はこの「知行宛行状」を受け取って7年後の元禄2年1月15日付けの文書で

今度御儉約二付、暇被出候、依  
之住所之儀、当領他領可為勝手次  
第候、尤奉公構無之旨被仰出候  
二付、如此候、以上、  
元禄二年  
吉住五郎右衛門  
十一月十五日  
寛正（花押）  
吉住 求馬  
通徳（花押）  
二神長右衛門

という内容の書状を受け取っています。藩財政の困窮により、儉約策の一つとして二神勘左衛門は暇を出され、そしてそれ以後再び森藩へ帰参することは叶いませんでした。

二神氏は勘左衛門の子息清右衛門（藤三）の頃までは主家と音信を交わしておりましたが、正徳5年（1715）の久留島伊予守書状を最後に完全に音信はとだえております。

二神文書を伝えております林家と二神家の関わりは、「林氏之家系」によってみると、二神種在（清右衛門・藤三）は、豊後鶴崎向屋敷で出店を構えていた林小右衛門の四男猶次郎を養子として迎えております。猶次郎は、名を祐安と改め医術を業としておりましたが、安永5年（1776）7月14日に没しております。二神藤三の消息は、享保10年（1725）までは確認できますが以後はようとして知れません。

#### 4 豊後二神氏の消長

二神氏は、先に見ましたように藩政初期の段階では4～5家の二神家がありました。しかしながら二神左馬進・二神治右衛門・二神喜内・二神慶用・二神利三などの系譜は、以後どのようになったか知る由もありません。

幕末まで系譜がほぼ分かるのは、二神長右衛門と五左衛門の系統のみでして、実際幕末まで続いた二神家はこの二家だけでした。

再び略系図を見てください。長右衛門之慶の孫種貫の系統は、系図によりますと、監物之房は、理由は不明ですが浪人して肥後へ移っています。この時、子息貞右衛門種貫も同行したのと思われます。種貫には、源介（後清介と改名）・文右衛門・長右衛門種興という子供がおりまして、種興は元禄三年に暇を出され関宿（現三重県関町）で病死しております。

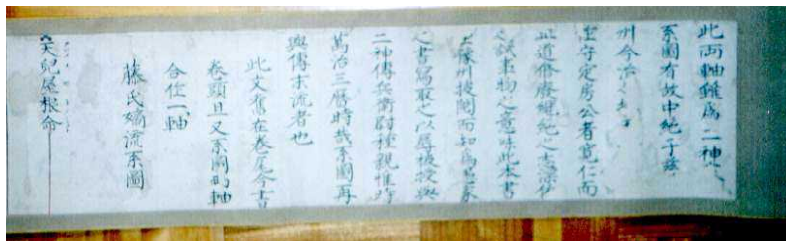
源介は、得能二神氏の「先祖書」によりますと、肥後で生まれ後帰参が赦され、得能伝兵衛禎宗の養子となっております。源介は元禄3年に財政の悪化によりリストラされますが、再び帰参がかなっております。文右衛門の子貞右衛門秀種は、清介種純の養子となっております。また秀種の娘婿の子新三郎種昌は、秀種の養子となるなど、この辺の系譜は非常に複雑となっております。

話は前後いたしますが、長右衛門之慶の次男（四男ともいう）伝兵衛種親には、子供がおりませんでしたので清水某の次男与伝次を養子として迎えましたが、寛文3年（1663）3月5日に参勤交代の途中、船が周防大島郡の沖合で難破し、水死してしまいました。この時2代藩主通春の四男通方も水死いたしております。

その後、種親の跡は通春の五男を養子とし、得能家をたて、以後家督の者が得能姓を名乗り、その他は二神姓を名乗るようになりました。

これももう皆様方にはとりたててお話しすることもないと思いますが、片山二神文書の中に「二神氏系図伝書略記」というものがあり、その中に二神牛之助種昌の箇所、「松平定房から二神系図閲覧を所望され上覧に供した」ことが書かれております。

また、玖珠の「得能二神系図」の中に、二神伝兵衛家の「系図は故あって中絶していたが、万治3年（1660）に今治藩主松平定房がこれを修復し、二神伝兵衛種親に与えた」とあります。おそらく牛之助が定房に系図を見せたときに、この二神系図を書写していたのでしょう。そしてこれによって得能二神系図の欠けている部分を補って修復したものでありましょう。



得能二神系図 由緒書の部分



得能新三郎種昌とその子二神国次親子は、安永6年（1777）4月に、二神島の二神家を訪ね、「自分たちも二神家の末葉である」と名乗って、「二神家の系図を見せてもらいたい」、と所望しています。それに対して二神氏は、「あなた方は通範の末孫であるのに、どうして得能と名乗っているのか」、と問い、得能親子は「先代が子細あって藩主より得能の苗字を拝領し、それより拠所なく家督のものは得能と名乗っている」と答えています。そして「部屋住みの者や家督を譲り隠居した後は、ふたたび二神と名乗る」ともいっております。

時代もさがって文化年間頃になりますと、どうして得能の苗字を名乗っているのか、その理由もわからなくなって、得能織衛は「得能の苗字を名乗っていることに対して恐れ入って、得能の苗字を差し上げ、二神と名乗りたい」、と藩庁に願い出ております。織衛の子石太良は、一時二神姓を名乗っておりますが、後再び得能の苗字を名乗っております。得能姓は伊予の名門得能氏であり、恐れ多いことと考えたのでしょう。

長右衛門之慶の弟で通春の時代に分家した五左衛門家も幕末まで続いた家であります。この二神家は、明治以降は女系のため二神姓は絶えましたが、九重町野上の橋爪家に二神政五郎が養子に行き、橋爪氏を継ぎ、現在橋爪家に二神系図が伝えられています。この二神氏にも得能新三郎種昌の子三左衛門が、養子として入っております。

五左衛門家の二神瀬兵衛種村も、文政5年（1822）に二神島に舟を泊め、二神家の元祖のことなども尋ねたいと思い二神家を訪ねています。しかし留守で合うことが出来ず、同氏の縁が尽きなければ拝顔の機会もあると思い、書状を置いて帰っております。

残念ながら幕末まで続きました五左衛門家には、系図しか伝わっておりませんので、詳細を知ることはできませんが、かろうじて文化年間の「先祖書」が残っており、少しはその事蹟を知ることができます。また、私共が得能二神家の系図を調査させていただきました当時は、得能家の「先祖書」の所在を知らなかったため、得能家の詳しい系譜は分かりませんでした。二神英臣さん等のご尽力によりまして、得能家の「先祖書」が発見されましたことは、これからの得能二神氏の研究に大変役立つものと思っております。

以上、「豊後森二神氏の400年」ということで長々とお話しをさせていただきましたが、皆様方の意にそったお話が出来たかどうか甚だ心もとなく思っております。それではこのへんで私の話を終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

## 二神氏ゆかりの地を訪ねて

No. 4

事務局長 二神 英臣  
常任理事 豊田 渉

大分県玖珠郡玖珠町

大通山安楽寺 得能二神氏・橋爪二神氏墓所

理性山成覚寺

藩主久留島屋敷跡周辺 二神氏屋敷(侍敷屋)跡

大分県竹田市会々

円福寺

山口県大島郡東和町地家室

久留島主膳の墓

慶長5年(1601)、来島康親公は伊予から九州の豊後森へ移封され、二神氏も康親公に付き添って入っています。ご存知のように、「豊後森」とは今の大分県玖珠町のことであります。康親公一行は一体どんな思いで、この地を踏んだのでしょうか。

海から山へ、まさに陸へ上がった河童の如きであります。手足をもがれたのも同然であった状態であったにせよ、村上三島のうちの一つとして幕末まで残り、水軍魂を持ち続けたのではと思ってもいいのではないのでしょうか。同行した二神氏のご先祖たちは当然のことながら、参勤交代の折には海路を東へ向かい、山口県屋代島や二神島や北条市の風景を眺めたに違いありません。それは森藩の絵師が船上から画いている風景画が残っていることでも裏付けられます。海への思いは代々と子や孫へと、営々として受け継がれていったのでしょう。

今号の「二神古文書の解説」で紹介されていますが、安永6年(1777)4月4日には豊後森二神氏のうち、得能二神氏八代目得能(二神)新三郎と子息二神国次親子が二神島を訪問し、二神種章と面談しています。それと、同じく同藩の橋爪二神氏十代目の二神瀬兵衛種村が文政5年(1822)3月8日にも二神島を訪れています。(詳しくは、「二神古文書の解説」を。)書面で残っているのがこの2例であり、このほか

にも訪れていることがあったかもしれませんが、今のところ確認できていません。

今回は、その玖珠町を訪ねてみました。

二神系譜研究会が、玖珠町での学習研究会に向けての下見のため、早朝に伊予（愛媛）を発ったのは、平成12年11月7日でした。その日の午後には、玖珠町に入りました。かつては、何日もかかったであろう道のりを、ほんの数時間で着いてしまいました。

松山観光港を出たフェリーは、海路大分へ。大分県に入って、湯布院・玖珠・日田の3つの山間盆地があります。その中の玖珠盆地の北の部分が玖珠町です。

---

### 大通山安楽寺(曹洞宗) 大分県玖珠郡玖珠町大字森鉄砲町 得能二神氏・橋爪二神氏墓所



安楽寺山門

豊後森藩主久留島氏の菩提寺として知られるこの寺は、来島康親が入部した翌年（慶長7年）に伊予国風早郡下難波にあった来島氏の菩提寺「安楽山大通寺」の分寺として豊後森に移し、風早郡の寺の山号・寺号を転倒して「大通山安楽寺」と呼ぶようになりました。

伊予国の「安楽山大通寺」は現在の愛媛県北条市下難波にあり、「貞和年間（1340～1350）に河野通朝が大暁禅師を開基として創営されました。しかし、度々の戦火で衰えていた寺運も河野通宣が曹洞宗永平寺の道元・孤雲らの法脈を継ぐ玄室守腋を招き明応8年（1499）再興しまし

た。その後小早川隆景の四国進攻により寺は炎上しましたが、来島通総が風早郡1万4千石の領主になったとき、寺領を寄進して再興に努めました」（『河野氏ゆかりの地をゆく』風早歴史文化研究会発行）北条市にある大通寺には「来島水軍の墓所」があり、来島通総を供養する宝篋印塔をはじめ来島衆の墓石があります。

さて、久留島氏の菩提寺安楽寺は得能二神氏と橋爪二神氏の墓所でもあります。ここには得能氏の初代に当たる得能主水種春をはじめ、その子傳兵衛禎宗など得能氏代々の墓石に混じって二神傳兵衛種親の墓石を始めとする得能二神氏や文政5年に二神島を訪問した橋爪二神氏の二神瀬兵衛種村の墓石が整然と列んでいます。もしも二神傳兵衛種親の後継者だった二神与伝次が周防国屋代島で遭難死をしなかったならば、あるいは得能氏と二神氏の墓地が同居することも無かったかも知れませんし、明治の初めに橋爪二神氏が二神姓を残す努力をしていたならば、一つの墓石に両家の苗字が列ぶことも無かったかも知れません。しかし歴史の事実は得能氏と橋爪家へと受け継がれ今日まで至りました。

二神氏が豊後森へ移住してきた当初は日蓮宗で、伊予国風早郡の時代には片山二神氏は日蓮宗法善寺を菩提寺としていました。このため、豊後森でも伊予国から移住してきた隣の日蓮宗成覚寺を菩提寺としていました。ところが明治の初めの廃仏毀釈で成覚寺は廃寺となり10年間無住職となったため成覚寺にあった橋爪二神氏や得能二神氏の過去帳はその殆どが安楽寺に移ってゆきました。またそれまで成覚寺にあった二神氏の墓石もこの間に安楽寺へと移動したものと考えられます。現在の成覚寺には二神氏の墓石はありませんが、安楽寺に移る以前の過去帳が残され、この中には林二神氏のものもあります。



得能二神氏墓所



橋爪二神氏墓所

### 理性山成覚寺(日蓮宗) 大分県玖珠町森941

J R 九大本線の豊後森駅から北の方向に旧森藩城下町があります。城のなかった森藩でしたが、神社の名目で築いたと言われるのが末広神社一帯で、いつでも城として転用できる構えになっています。成覚寺はその末広神社のすぐ近くにあり、安楽寺や大乘寺などと共にありました。

宗派は日蓮宗。桜木誠研住職。寛永元年（1624）豊後鶴崎法心寺二世学泉院日泰が、伊予より久留島出雲守越智通政の外護により成覚寺を移転し、現在地に創建されたということです。明治3年（1870）に廃寺となりますが、明治19年（1886）に、現本堂として完成しました。

ここには、林二神系譜に属する二神嘉林をはじめ、多くの二神氏がこの過去帳にあります。墓石はここにあったと考えられますが、明治時代はじめの廃仏毀釈の時に散逸し、一部は近くの安楽寺に移動しています。今後の確認作業が必要でしょう。



理性山成覚寺

---

### 藩主久留島屋敷跡周辺 大分県玖珠郡玖珠町大字森 二神氏屋敷(侍敷屋)跡

玖珠町森にある三島公園一帯は、かつて藩主久留島氏の屋敷が建っていたところでその周辺には二神氏をはじめとする家臣団の家屋敷がありました。

森藩初期に作成されたと見られる「豊後国玖珠郡 久留島丹波守屋敷絵図」（河上隆幸氏所蔵）には東西五拾間、南北五拾八間と書かれた藩主久留島丹波守（通春）の屋敷が表門とその周囲を塀で囲んだ形で、西には

角埋山を背景にし、藩主の屋敷を取り囲むように侍屋敷が建っているのが描かれています。また倉屋敷とかかれた建物も見え、寺と表示されているのは場所からみて、安楽寺と大乘寺ではないかと見られます。

来島康親が豊後森へ移封するときの家臣団の体制について「康親は浅川六助を総奉行に任命し、屋形と陣屋町の建設に取りかかるとともに、高田勘兵衛と二神長右衛門(之慶)を家老に任命して藩体制の整備にかかった」(「森藩」『大分県史・近世篇』野口喜久雄)とされています。そして浅川、高田、二神などの重臣の屋敷は藩主屋敷の上手北方面にあったと云われます。現在の三島公園の上手北方面には民家が建ち並び当時を伝えるものは殆ど残っていません。

竹野孝一郎氏が学習交流会の講演のなかで、来島康親が森へ入部した後、江戸や豊後森に家臣の屋敷が整備されてゆく様子についてのべ、その中で豊後森に二神左馬進(種慶)の屋敷が新たに加わった様子が書かれている「大守公(通春)御先祖有増覚」を紹介しています。それによれば「(中略)又、国の御屋敷に二神左馬進と申し候者の屋敷加わり勢溜加わり今は長右衛門(二神之慶)屋敷に藤四郎元屋敷、善之進屋敷、八郎左右衛門屋敷、相加わり大分にまかり成り候事」

このように豊後森での二神氏を始め家臣団の屋敷は現在の三島公園を中心にした一帯に広がっていましたが、今日では絵地図の世界でしかそれを想像することは出来ません。



家老二神長右衛門屋敷があったと伝えられる三島公園上手北方面を望む

---

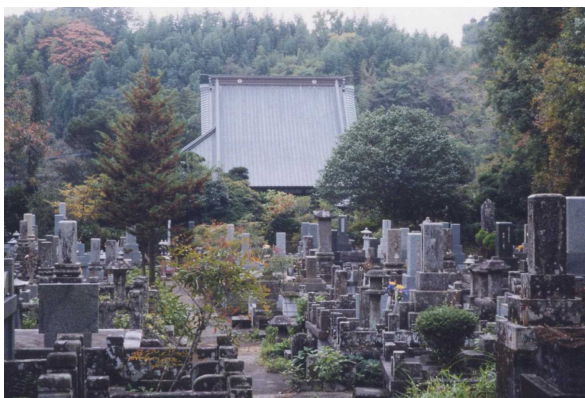
## 円福寺 大分県竹田市会々2540

法華宗の寺院で、JR竹田駅のすぐ裏手にありました。あいにくと、ご住職は不在でした。応対していただいた奥様のお話では、過去帳は、明治時代初年に焼失し、「明治以降のものは無い」とのことで非常に残念でした。

林二神系図によりますと、二神嘉林、嘉鑑、種在の長子3人は「竹田円福寺に葬る」とありますが、円福寺で墓石の確認はできませんでした。過去帳は焼失しているとのことでしたので、墓石の確認でもとは思ったのですが、幽鬼漂う本堂裏の墓地は、両側を切り立った岩壁に囲まれ、奥深い山手の向こうまで墓石がありました。きちんと整備されておらず、草はぼうぼうで、無数の墓石が無縁状態で放置されてありました。

前日訪ねた玖珠町の成覚寺の過去帳に、嘉林の法名を見つけました。それは、林二神系図の記述と一致しましたが、でも、ここには嘉林の墓石はありませんでした。嘉林の墓石はいったいどこにあるのでしょうか。

残念な思いの中、円福寺をあとにしました。



円福寺

---

## 久留島主膳の墓

山口県大島郡東和町地家室(じかむろ)



久留島主膳の墓

寛文3年(1663)3月5日大事故が起こりました。豊後森藩主の乗った参勤交代の御座船が周防国屋代島にさしかかったとき春の大嵐に出会い、供船に乗っていた二代藩主久留島通春の四男主膳通方以下11名の藩士が溺死する事故が発生しました。この事故で豊後森二神氏の中興の祖とも云われる二神種親の嫡女の婿で三代目二神与伝次も主膳等と共に亡くなりました。このため二神伝兵衛種親の系譜はやむなく次女の婿で藩主久留島通春の五男通音(種春)へ継承されることになり、二神氏でありながら得能氏を名乗る事情がここに発生することになります。

さて事故の後、屋代島の普門寺に遺体を安置し、同寺六世、寿山和尚が引導焼香し犠牲者を弔いました。森藩で参勤途中藩主に関わる大事故はありませんでしたが、唯一この事故が歴史に刻まれました。この事故について後の八代藩主久留島通嘉が天保2年、その菩提を弔うために屋代島に使者を出して、墓石を建立し、普門寺に供養費を贈っています。



覚

一、白銀三枚  
右は白性院殿雄岩常英大居士、御茶湯料ならびに御廟所掃除料のため御寄付遊ばされ、たしかに寺納仕り候、猶永代退転無く御回向供養仕るべく候、よって請取件の如し

天保二年卯六月五日 周防大嶋郡 普門寺  
久留島伊豫守様 御使者嶋六郎大夫様

〈別紙〉

華影壽法居士	村上久右衛門
無外宗關居士	二神与伝次
梅庵榮林居士	古河梅庵
三庵壽心居士	古河三庵
不二道可居士	仁品十次郎
列山檢雲禪定門	蔵成七兵衛
關窓良鐵禪定門	興二兵衛
南窓龍薰禪定門	文之丞
無山淨一禪定門	俗名不知
月窓道圓禪定門	三吉

右は寛文三年癸卯三月五日江戸お登りの節、地家室にて破船の衆中御死去、当寺にて焼香仕り候にて御位牌これ有り候、以上

周防大嶋郡日前村現住普門寺 十五代際道

【参考】御座船の供船が遭難した屋代島は二神島から程近く、九州からの参勤交代の船はしばしばこの水道を通過していた模様です。森藩のお抱え絵師武石家には海路各地の風景を描いた水墨画が残され、それらの中には二神島も描かれています。

この時、事故死した二神与伝次の戒名無外宗關居士は二神島の本家九代目二神家種の戒名である一山宗清居士を始め代々戒名に宗の文字を付けていることから、この時既に豊後森二神氏と本島二神氏との間で交流が始められていた可能性が高いと考えられます。

## 豊後森二神氏関係文書 (本島二神氏近世文書より)

今回は会報第4号が「豊後森二神氏特集」でもあるため、豊後森二神氏に関する二つの古文書を取り上げてみました。これらの文書について神奈川大学日本常民文化研究所の特別研究員関口博巨氏に解説をお願いしました。

一つ目は、豊後森二神氏のうち、得能二神氏八代目で豊後森藩士だった得能(二神)新三郎とその子息二神国次親子が安永6年(1777)4月4日に二神島を訪問しました。当時、本島二神家の当主だった二神種章と懇談し、二神系図や先祖のこと、また得能氏を名乗っていることの説明などを行った経過について、二神種章がその記録をしたものです。

豊後久留島信濃守殿御家中者頭役  
覚  
得能新三郎殿  
子息 二神 国次 殿

右者、安永六年酉四月四日、右新三郎殿、二神湊へ船繫被致候由二而当家江尋被参、元来当家之末葉二候之由被申、当家系図披見被致由二付、彼是相尋候之処、二神隼人佐通範より之末孫、久留島信濃守殿江有付奉公相勤被申候由、先祖御家老職被相勤之処、子細有て当時ハ物頭役被相勤之由被申候二付、成ほど通範之儀ハ当家之先代二有之候、併通範之末孫二候ハ、何とて得能与御名乗候哉と相尋候処、是ハ御尤二存候、先代子細有て得能之苗字旦那より拝領致、夫より無扨家督之者ハ得能と名乗り候、部屋住又隠居之後ハ二神ト名乗り申候、則悴儀ハ二神国次ト申候与被申候、依之尤二被存候二付、系図等も見せ可申与申内、及晩景候二付帰船被致、翌五日又々改テ家来引具シ被参候二付、系図其外書付并左文字則光等之腰物迄も聞及居被申由二付見せ申候、依之向後ハ以便宜書中取遣り被申度由二付、其段同心申候、則此度信濃守殿京都在番二江戸より御出二付、右新三郎殿も国本より大勢同船二而被罷登候之由、則其後京都へ書状遣候之処、右返簡致到来候、以来是後々書中折々遣可申事久留島信濃守様大坂御蔵屋敷中島御役人

辻新左衛門殿  
右之宛ニテ書状差越候様ニと被申置候二付、  
則右あてニして遣申候処、無滞相届申候

## 【訳文】

覚

豊後久留島信濃守殿御家中者頭（物頭）役

得能新三郎殿

子息 二神 国次 殿

（右は……〈右の兩人についての覚〉というほどの意味と考えておきたい）安永六年酉四月四日、右の新三郎殿は、二神湊に船繋ぎされた折りに、当家を尋ねて来られ、「〈新三郎家は〉元来、当家（二神家）の末葉（末裔）である」とお話になり、当家の系図を披見する（披見したい）とのことなので、〈私〓種章から〉かれこれと尋ねたところ、〈新三郎家は〉二神隼人佐通範よりの末孫（通範の血筋をひく末孫）で、久留島信濃守殿への仕官にありつき、奉公勤めしてこられたとのこと。先祖は御家老職を勤めておられたが、子細（ちよつとした事情）があつて、現在は物頭役（武頭役とも書く。足軽頭）を勤めておられると言われる。そこで〈私は〉、「なるほど通範は当家の先祖であります。しかしながら、通範の末孫であるならば、どうして得能とお名乗りなのですか」と尋ねたところ、〈新三郎殿は〉「これは（その疑問は）「もつともだと思ひます。〈新三郎家の〉先代が子細あつて得能の苗字を旦那（久留島氏か？）から拝領し、それ以来、やむをえず家督の者（家督を相続した者）は得能と名乗っています。部屋住（親がかりの身分）または隠居後は、二神と名乗ります。そのため俵は二神国次と申します」と説明した。これは道理になつていふと思われたので、〈私からも〉「系図なども見せましょう」と言つて内にて夕方になつた。そのため〈新三郎殿は〉「帰船され、翌五日、またまた改めて家来を引き連れて参られたので、系図やその他の書付（を見せ）、また左文字則光などの腰物（刀）についても聞き及んでいふと申されるから（それも）見せた。このよくな訳で、〈新三郎殿は〉これからは便宜（書状の送り方の一種。この場合は、京都詰の者に書状を託すことか）によつて手紙をやり取りしたいとのことなので、〈私も〉それに同意した。とりもなおさず、このたびは、信濃守殿が京都在番のために江戸からお出でなので、右の新三郎殿も大勢で同船して（京都に）登つてこられたとのこと。そこでその後、京都に書状を遣わした（送った）ところ、右の返書が到来した。以来、この後々、〈新三郎殿へ〉手紙を折々遣わす（送る）べきこと。

久留島信濃守様大坂御蔵屋敷

中島御役人

辻新左衛門殿

右の宛先に書状を出してくるようにと言つておられたので、その通りに  
右宛てにして〈手紙を〉遣わしたところ、滞り無く届いた。

※ 〈 〉内の文言は、原本にないものだが、訳文の調子を整えたり、内容を理解しやすくするために訳者が補った。

※ ( )内には用語解説をほどこした。

※ 会話部分は、必要に応じて「 」で括った。

もう一つは、橋爪二神氏十代目で豊後森藩士の二神瀬兵衛種村が文政5年(1822)3月8日に二神島を訪れ、当主の二神種五との面会を求め先祖の事などを聞こうとしましたが、あいにく当主が不在で会うことが出来なかったため種村が置き手紙をしたため、置いて帰った花押入りの記録です。

一豊後国玖珠郡森領主久留島伊予守内、元祖当二神島  
二神何某分レ、今二伊予守内江不絶、二神ヲ名乗罷在  
候、右当所滞舟致し候二付、元祖之事とも御尋申上度  
推参仕候処、不掛、御目残念此事二御座候、尤御留守  
江罷上り御世話二相成忝仕合奉存候、同氏之御縁不尽  
候ハ、拝顔之期茂有ん、一紙一筆差上置候、以上

文政五年  
午三月八日  
二神瀬兵衛  
種村(花押)

【訳文】  
一、〈私は〉豊後国玖珠郡森領主久留島伊予守の家来へ  
す。元祖はこの二神島の二神、何某の分かれて、今に  
いたるまで伊予守家において絶えず二神を名乗っており  
ます。当所(二神島)に滞舟しましたので、元祖のこ  
となどをお尋ね申し上げたく推参いたしました。が、御  
当主に、お目にかかれず残念なことではございました。そ  
うはいもうもの、お留守にお邪魔したうえお世話にな  
りましたこと、まことに有り難く存じます。同氏の御  
縁は(今後)も尽きることはありませんので、(いづれ)御  
拝顔の期もあろうかと(思)い、一紙一筆差上げた次  
第です。以上。

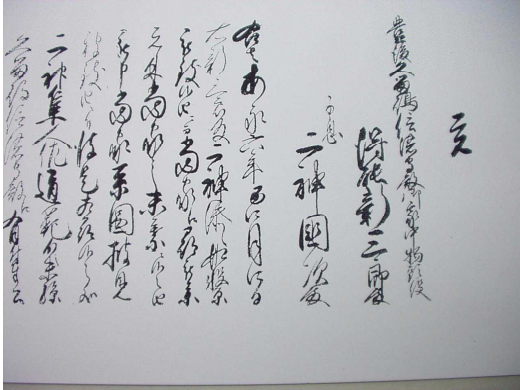
文政五年  
午三月八日  
豊後玖珠郡森久留島伊予守家来  
二神瀬兵衛  
種村(花押)

※ 〈 〉内の文言は、原本にないものだが、訳文の調子を整えたり、内容を理解しやすくするために訳者が補った。

※ ( )内には用語解説をほどこした。

本島二神氏が所持していた膨大な古文書類は、現在、神奈川県立日本常民文化研究所の手によって調査研究が進められていますが、約3年間の調査によってほぼその内容が解析されようとしています。

二神系譜研究会では準備が整い次第、神奈川県立日本常民文化研究所のご協力を頂き、現地二神島で「二神文書学習説明会」（仮称）を開催する予定にしています。



得能新三郎と二神国次親子が安永6年4月4日に二神島を訪問、二神種章の記録。



1999年5月30日に開催しました。  
二神島交流会にて記念講演中の関口博巨氏

#### 訂正とお詫び

会報第3号「二神文書の解説」第2回「宅並二神衆と鴨部郷」の中でP27の13行目にある「蒼社川の堤防に沿った5万<sup>石</sup>」とあるのは「蒼社川の堤防に沿った5<sup>町</sup>」に訂正します。大変ご迷惑をお掛け致しました訂正してお詫びを申し上げます。

## 豊後森(ぶんごもり) 二神氏

「豊後森二神氏の始まりは、1601年(慶長5)来島康親公の移封に従って豊後森藩へ随行した二神田兵衛種則の孫、二神之慶と二神著勝である」(『玖珠町史』上巻 P360) とされています。

昨秋、玖珠町で、豊後森随行400年を記念して開催された「二神氏学習交流会」で記念講演を行った竹野孝一郎氏(玖珠史談会)によると「伊予国二神氏の中興の祖とも云える二神通範の系図上の子孫で得能二神氏の系図に現れる4人の人物の内、その後発展していった系譜が三系譜あります」と述べられていることから、今回はそれに従って三つの系譜を紹介します。

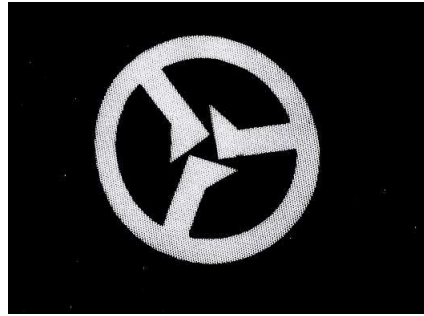
豊後森二神氏系図は、二神通範の次男として二神種房を存在させていますが、その種房の次男に二神著弘がいます。豊後森二神氏400年間を振り返って結果としてこの二神著弘の系譜が今日まで継続して発展してきたと云えます。その著弘の子に之慶と著勝があり之慶の系譜が得能二神氏に、著勝の系譜が橋爪二神氏へと様々な変遷を辿りながらも継続してきました。

一方、林二神氏は通範の三男種春から発展してゆきますが、五代目二神嘉鑑の代に藩財政の困窮により儉約策の一つとして打ち出された「召放ち」となり豊後森を離れて豊後竹田に移住をします。その後、豊後竹田では二代しか続かず、絶家となり養子の出里、林家に古文書類が引き取られ今日に至っています。

## 得能二神氏

得能二神氏は、通範―種房―著弘―之慶―種親と続いて来るまでは二神氏を名乗っていました。二神種親は今日で云うところの「得能二神系図」の制作者であり、その制作経緯については初代今治藩主で徳川家康の異父甥にあたる松平定房が関係していることについて、既に「二神系譜研究会速報NO. 5」で報じているところです。

ところが歴史の運命は種親の跡継ぎに男子が無く、長女に清水家から婿養子に与伝次を迎えた後に起こります。寛文3年(1663)3月5日、参勤交代で上阪中の供船が周防大島の地家室沖の磯岩に激突し、二代藩主久留島通春の四男主膳通方以下11名の藩士が死亡する事故が発生します。この時、遭難した11名の中に種親の娘婿二神与伝次が乗り合わせていました。(別項参照)



この時、与伝次には後継ぎが無く絶家、この事故のため伝兵衛種親の系譜は次女の系譜に移ってゆくことになります。次女の婿には二代藩主久留島通春の五男種春を迎えて、種親と養子縁組を行い二神家が絶えないようにしましたが、なぜか故あって長男だけには得能姓を名乗らせるようにします。(得能家明細書)しかし、次男以下その他の者は全員二神姓を名乗らせることとし、ここに二神氏の継続が実現しました。この事故から114年後の安永6年(1777)4月に得能新三郎、二神国次親子が二神島を訪れましたが、この時の本島二神氏の当主だった二神種章から得能姓を名乗っていることについて尋ねられたやり取りの中に得能姓を名乗った経緯が記録されています。(別項参照)

このような経過から伝兵衛種親の系譜は今日まで継続してきた訳ですが、得能氏を名乗った以外の者は二神氏を名乗っていなければならないのに、なぜか得能二神氏の系譜の確認がされていないことです。ただ、得能家明細書の中には肥後国へ移っていった二神種久の系譜などがあり孫の二神種純は肥後国で生まれた後に、得能二神氏の代を継ぐなどしており、肥後国でも発展したであろう二神氏と豊後森二神氏との関係は継続していたと考えられます。

#### 【得能二神氏略系図】

通範—種房—著弘—之慶—種親—種春—禎宗—種純—委種—種昌—種安—種房—種成—益吉—種生—年国

【家紋】 五徳

【菩提寺】 曹洞宗安楽寺

## 橋爪二神氏

橋爪二神氏の系譜は明治初年頃までは伝兵衛種房の流れの二神氏として続いてきましたが、著勝から数えて12代目の二神種実の時代になって後が絶えました。しかし、種実の末弟の政五郎が玖珠郡野上村の庄屋、橋爪家に養子で迎えられる形でその系譜は現在まで継続してきましたが、苗字としては、二神氏も、そして二神政五郎の養子先の橋爪氏も絶えてしまい、現在御子孫の手で旧姓の回復がされようとしています。

橋爪二神氏12代にわたる人物の中で、記録に残る範囲だけで見ると一人だけ伊予国の二神島へやってきた人がいます。それは10代目の二神種村で、文政5年(1822)3月8日に本島二神家を訪問しましたが当主に会えなかったために種村自ら花押を残し島を去っています。(二神文書の解説を参照)また、橋爪二神氏の系譜は得能二神氏同様に豊後森藩士として勤め、明治維新を迎えますが、この間に久留島氏は家来に「先祖書」を提出させています。その中でも文化6年に提出させた「御中小姓先祖書」には、橋爪二神氏最初の先祖として二神二郎が登場し、「本國伊豫、生國不相知、天文13年11月2日領地目録御判物、大雄寺様御代之 御墨附頂戴仕候」と記されています。この後、二神三左衛門、五左衛門、軍右衛門、瀬兵衛、など歴代橋爪二神氏の人物の知行高や経歴などが記載されています。この「先祖書」の作者は後に二神島を訪問してきた二神瀬兵衛で、文化6(1809)巳年9月と奥書された先祖書には花押が記されており、本島二神家に残された訪問書きの花押と一致します。

そしてこの「先祖書」に橋爪二神氏の家紋のことも記載されており、それによると「紋丸之内二之字」とあり、これは現在の橋爪家の家紋と一致し、二神政五郎が橋爪家に養子に入るときにこの家紋を持ち込んだのではないかと考えられています。



紋丸之内二之字

### 【橋爪二神氏略系図】

通範－種房－著弘－著勝－種正－範種－五左衛門－三左衛門－軍右衛門－瀬兵衛－五左衛門－三左衛門－種村－種行－種実

【菩提寺】日蓮宗成覚寺



## 林二神氏

林二神氏の系譜は通範の三男二神種春から始まり安永5年に林家から養子に迎えた祐安が没するまでの7代にわたり続いてきました。

この林二神氏の豊後森や豊後竹田での足どりは、同家に伝来してきた「片山二神文書」を併せて明らかにした「大分市府内町林四郎氏所蔵二神文書および二神系図について」（竹野孝一郎執筆、「玖珠郡史談第12号」昭和59年9月発行）をご一読頂ければ理解してもらえるものと考えますので、ここでは触れませんが、伊予国時代からの伝来の文書や物を所持していた系譜として、そして林二神系図に記された各時代の人物の略記が、日本歴史の表舞台の出来事に関連しているだけに、これらの人物の経歴を辿る場合に判りやすい側面を残しています。

元禄2年に藩財政の窮乏から「召し放ち」となり嘉林、嘉鑑親子は豊後竹田に移住し、林家から養子を迎えながらもこの地で同系譜は絶家となり、それまでの同系譜の一族は円福寺に眠っています。豊後竹田の円福寺では同系譜の墓石は未確認ですが、なぜか二神嘉林の過去帳が豊後森の成覚寺に残されているのを確認しています。また、林家から養子に来た祐安(猶次郎)の戒名が「慈雲院止道日観」で安永5丙申年7月14日に没していることも解明されており今後の同系譜の未解明の部分にスポットが当てられて行くものと考えられます。

なお、「林二神文書」について、現在その存在を確認中で、同系譜伝来の中世二神文書のひとつ、「大友義統状」などが早く発見され公開される日が一日も早く訪れることを願しつつ同系譜の紹介とします。

### 【林二神氏略系図】

通範－種春－種明－光成－嘉林－嘉鑑－種在－祐安

【家紋】 現在までのところ不明

【菩提寺】 法華宗円福寺

## 連載 二神氏と苗字の歴史 第3回

### 「豊後森 二神氏」

事務局長 二神 英臣

連載の「二神氏と苗字の歴史」のコーナーが都合により前回お休みをしていました。これは編集上の都合で休載していたもので、関係者にはご迷惑をお掛けしました。

さて、前回までは「明治新姓時代」から始まり、藩政時代公称を禁止されていたにもかかわらず二神氏が苗字を公称している事例について、具体例を挙げながら紹介してきました。

今回は「豊後森二神氏特集」ということもあり、慶長6年(1601)来島康親公に随行して豊後森に移った二神氏がその後、様々な歴史的経過の中で、血脈(いわゆるDNA)は継続しながらも二神姓が継承されず、明治の末に途絶えていった経緯について述べながら、豊後森における二神氏の苗字の変遷について述べてみたいと思います。

関ヶ原の合戦で西軍に属した来島康親は戦後、伊予国の風早、野間、越智郡1万4千石の所領を失い、ほとんどの家臣が離散し、康親の元に残ったのは二神氏や浅川氏、大林氏など僅か十数人だったと云われています。その後、福島正則の取りなしで豊後の国日田、速見、玖珠三郡の内に1万4千石を知行され慶長6年(1601)9月、それまでの生活の舞台としていた瀬戸内を離れ、中九州の奥地豊後森にやってきます。

「康親は、六助に命じて陣屋と城下町の建設を行うと共に、高田勘兵衛と二神長右衛門を家老に任じて家臣団の編成を行い、藩体制の整備に着手した」（「伊予二神氏と二神文書」福川一徳氏著）

この時、来島康親に随行した二神氏は後の得能二神氏の祖となる二神長右衛門之慶と云うことになっています。「玖珠二神系図」（竹野孝一郎氏作成）によれば之慶は豊後森二神氏の中で三代目の時代に位置しており、伊予二神氏中興の祖で之慶の高祖父に当たる二神通範（法号樹枝道種居士・元和2〈1616〉丙辰年7月15日没）がこの時生存していることを考えると通範が相当長生きをし、長右衛門之慶がかなり早く世に出た場合に系図上での関係が証明されるものと考えられます。

さて、ともかくもこのようにして豊後森へ移住した二神氏ですがその後400年の歴史の中で三つの系譜に分かれ、明治の末には二神氏を名乗る系譜が無くなり今日の状況に至る経過をたどります。

豊後森での得能、橋爪、林系譜の二神氏の紹介については別項の系譜・家紋紹介欄をご覧になって頂きたいと思いますが、得能二神氏と橋爪、林二神氏とは前者が藩主から得能と名乗るように指示されて名乗ったのに対し、後者は直系譜が絶えいわゆる絶家となったため血筋と縁戚の関係から系譜整理上「二神系譜研究会」の方で現在の御子孫の苗字に付随して呼んでいる違いがあります。

得能二神氏の場合、その祖となる得能通音（主水）は二代藩主久留島通春の五男として誕生し、二神種親の二女と結婚します。が、それより前の寛文3年3月に豊後森藩の御座船の供船が屋代島で遭難し、二神種親の長女婿二神与伝次が亡くなってしまいます。（別項参照）この事故により二神種親の系譜は絶えるため、次女に婿養子の久留島通音を迎え二神家の存続をはかろうとします。ところが、久留島通音の父で藩主の久留島通春は既に通音になぜか得能姓を名乗らせます。この経緯について得能家では同家の過去帳に当たる「明細書」（得能種成作成）のなかで次のように述べています。「主

水義安祥院様御五男ニ御座シ処傳兵衛男子無之ニ付婿養子得能之御名字御持之為主膳右近後主水ト改名仕ル(明細書・得能ニ神氏所持より)つまり久留島通音が二神家に婿養子に来たときにはすでに通音は得能姓を名乗っていたことが判ります。

因みに、得能氏は伊予国の豪族河野氏系譜出身の名家で、南北朝時代に活躍した得能通綱が知られています。藩主通春が得能氏を五男通音に名乗らせた理由は、南北朝の時代に久留島氏の遠祖である村上義弘と連携し、南朝方の勝利のため故郷の瀬戸内を舞台に水軍を率きいて活躍した得能氏への強い思いがあったためではないかと考えられます。

次に橋爪二神氏の系譜と苗字についてその歴史を辿ってみました。橋爪二神氏は二神五左衛門著勝を祖とする系譜で幕末には二神種村が二神島を訪問するなどしています。「御中小姓先祖書」にも三左衛門や五左衛門などが登場し、系譜の継続においては最も安定した歴史を刻んできました。ところが明治に入ってから系譜が存続できない事情が発生します。12代目二神種実には子供が無く、種実の次弟も早世し、養子に出た末弟政五郎の長女を養女にして13代目を継がせようとしませんがこれも実現せず結局、昭和15年に養女が亡くなり事実上、二神著勝を祖とする系譜は絶家となります。

苗字の上では絶えましたが、血筋としては橋爪家で継続されて来ました。しかし、その橋爪家も男子が無く、現在橋爪家の復活に向けた努力がされようとしています。(衛藤洋子さん談)しかし現戸籍法の定めでは橋爪氏の復活は可能でも二神氏までの復活は不可能です。

林二神氏の場合は他の豊後森二神氏系譜とは少し違った事情をたどり豊後森にやってきました。林二神氏の祖と思われる二神勘左衛門種春に関する古文書などは全くなく、「林二神系図」に名前が記録されているのみです。次の二代目二神種明は修理進、法名を瑞庵

と呼び戦国末期は来島通總に仕えていましたが関ヶ原の後は加藤嘉明の家臣となりました。その子の七太夫は、これより先に来島通總か黒田如水に従って天正12年(1584)16才で岸和田城攻めに参加、戦功を立て、その後黒田氏に仕えました。寛永14年(1637)息子の九大夫と共に肥前有馬に出陣し、翌年1月の天草四郎の乱により原城総攻めで討ち死にしました。その後、九大夫は黒田家に残りましたが、嫡子七大夫が島原の乱後、原城守衛の任務に就いていた久留島通春の招きに応じ、豊後森に来たと想像されます。つまり、得能、橋爪二神氏の系譜が来島康親に随行して豊後森へ移住してきたのに対し、林二神氏は筑前黒田家に仕えた後、二代藩主久留島通春の招きによったため、他の二神氏とは少し時代が下がったの移住と云えます。天和2年(1682)4代目藩主久留島通清から二神嘉林に150石が与えられます。しかし藩の財政事情から元禄2年、嘉林、嘉鑑親子は「召し放ち」となり豊後森を去り、豊後竹田へ移住します。そして種在に後継ぎが無く林家から猶次郎を養子に迎えますが続かず中世以来継続してきた修理進系譜の二神氏はここで絶家となりました。その時期については猶次郎(祐安)の没した安永5年(1776)7月14日前後のことであった。(「大分市府内町林四郎氏所蔵二神文書および二神系図」竹野孝一郎氏著)と云われています。

このような経過を経て、豊後森での二神氏の苗字は昭和の時代にすべて無くなってしまいましたが、伊予国を出て400年の間、この地に残してきた二神氏の足跡は現在も玖珠郡のあちこちに確実に残りその歴史を今に語り伝えています。これからの時代、夫婦別姓の問題も含めて、私ども二神姓を名乗る者達に課せられた任務と責任には大きなものがあることを認識しつつこの項の終わりにしたいと考えます。

今回は二神氏の中で、現在判明している画人を特集します。ただし、現在ご活躍中の画人を除き、既に故人となられている画人に限らせて頂きました。なお、遺作には色彩鮮やかな作品も多くありますが、本会報の経費の関係上モノクロでの印刷になることをお許し頂きたい。

**二神 種亮** (通称；牛之助のち平策)  
号 (栗舎、樵夫、柳陰、鶴翁、禹港)

二神 浩三記

栗舎のことについては、「海の民ふたがみ」創刊号ならびに第3号(俳人)に述べてきたように、安永末か天明初年(1778～1781)に風早郡(現北条市)で生まれ二神牛之助種亮と称し、土居二神氏の7代目となり、柳原の庄屋で松山藩の郷士でもあった。

当時の風早地区では有数の文化人で、地方俳壇の名士であるとともに私塾を開いて育英にも尽くした。慶応2年(1886)6月25日に80数才で亡くなった。画人であったと云う記録が北条市史にあったが、その作品は不明のままであった。それが一昨年偶然にも松山市内でその掛軸が2本発見された。

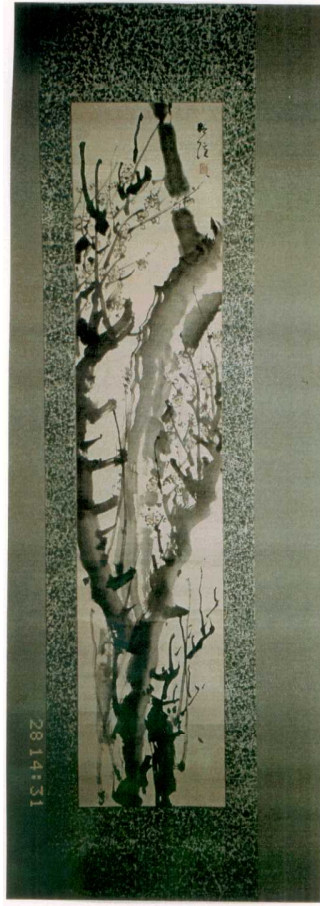
写真にあるように「山水図 栗舎樵夫」と「梅花図 柳陰」の2点である。共に南画で、山水図は中国風の遠近法で画かれているが、その上部には日下伯巖(松山藩の藩校 明教館の教授、慶応2年82歳没)の筆による漢詩が記されている。これから見ても栗舎が日下伯巖と親交のあったことが伺える。種亮は幾つかの画号を持っていて、この山水図には「栗舎 樵夫」の揮毫がある。



山水図

日下伯藏詩贊（明教館教授 慶応二年（1866）82歳没）

栗舎 樵夫



梅花図

柳陰

一方、梅花図は力強いタッチで梅の古木を表わし、白い可憐な梅の花が香を発しているかのようなのである。これには「柳陰」の揮毫が見える。  
これらの作品以外にも未発見の絵があるものと考えられるが、どこかの古物商の倉庫か旧家の土蔵に眠っているのかも知れない。

## 西岡 種憲 (号:園月)

明治3年9月29日北条市柳原生まれ、  
昭和23年6月14日没。享年79才



西岡種憲

### 「祖父 園月の思い出」

西岡関(現愛媛女流美術協会会員)さん記

私の祖父(種憲)への思い出は、割合に断片的である。私は小学四年生まで松山で過ごした。年に一度くらい田舎(原町)に住む祖父の所へ遊びに行っていた。松山からバスに乗り、父がバスの車掌さんに高尾田と云う停留所で降ろすように頼んでくれたものだ。心配だったのだろう。バスを降りると下男がリヤカーを曳いて待っていてくれて、私をそれに乗せ、連れて帰った。松山育ちの私には、それが何とも気恥ずかしくて嫌だったけれど、小嬢には家までの長い道程を歩かせるのは可哀相だと云う祖父の優しさだったのだろう。家に着くと、「小嬢が来た。」と言っては喜んでくれた。私は決まって「小嬢さん、小嬢さん。」と呼ばれていた。

祖父は、八畳の部屋を画室にして緋毛氈を敷き、暇があれば絵筆を持った。祖父が絵を描いている時、子供の私はその傍らに、ちょこんと行儀よく座り込んで、筆の運びを面白く眺めていた事を思い出す。そんな時は、大作など描くのは止めにして、巻紙とか半紙とかを出してきて、私の好きそうな蛸や蟹や花の小品ばかり描いてくれた。

絵筆を運んでいる時の祖父は一言も口を利くことはなかった。私も一言も言わなかった。ただ黙々と描き、私も黙って眺めているだけである。今振り返って考えてみると、子供の私も随分お行儀が良かったものである。祖父は、字の方も達筆で、私の教科書の名前などを書いてくれていた。

「お祖父ちゃんは、どこで勉強したの。」と聞くと「近藤と云う塾があって、そこへ行った。」と言っていた。私が大きくなってから分かったことであるが、その塾は、士族の子弟が行く所であったと教えてくれた人がいた。また、祖父は春光会と云う画会に入っていた。千島石泉先生を始めとして、藤田三友様、前田五健様等々、人数は定かではないけれど、かれこれ、十数人はいたであろうと思



われる。書の方もお一人いらしたことを記憶している。

画会は月に一度くらい、あちらこちらで開かれていた。私の幼稚園時代は松山仏教会館(今の東署のところ)、また、私の家でも十人位は集まられた。女の方も何人か居られて、春の土筆の出る頃にお呼びすると、山遊びの方が面白くて、画会が絵にならなかったようであった。

また、戦争中の頃必ず温泉郡北吉井村の傷痍軍人療養所へ絵筆を持って慰問に行き、そこでも画会が開かれていた。当時の新聞にも春光会療養所慰問の記事が写真入りで掲載せられたのを記憶している。その頃したためられた手紙の何通かのお礼状も戴いて居り、驚いたことには絵のお礼もさることながら、宗教のお礼まであり、白隠禅師とか嘆冥抄とかが記されての祖父宛ての御礼があった。病で亡くなる前の方々も居られたであろうから・祖父園月は非常に信仰心が厚く、その道の勉強もしていたので、色々とお話も出来たのだらうと思う。

春光会のことも、もう一昔前のことで、どなたもこの世には居られず、それでも絵だけはあちらこちらに散らばって生きていて、私の手許にも、石泉様、三友様、五健様の絵が残っており、また、皆々様の画会の時の寄せ書きもあり、これが昔を偲ぶよすがと、懐かしい遠き日の思い出となっている。

(以下 二神浩三記)

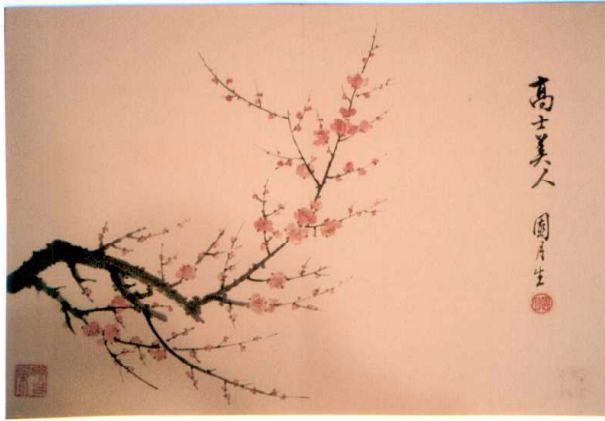
西岡種憲は、土居二神氏の9代目二神種成の次男で、下浮穴郡麻生村(現在伊予郡原町村)の造り酒屋であった西岡家に養子として迎えられた。種憲は明治35年原町村の村長になったが、飽き足らず、明治36年3月渡米した。アメリカではカリフォルニアで牧畜を始め、成功していたが、火災に遭い、明治40年帰国した。

アメリカでのオレンジ栽培を見てきた種憲は、郷里砥部町の気候風土が蜜柑の栽培に適していることに目を付け、適した蜜柑の種類を選択とその栽培方法を研究し、当時の農事試験場長三橋八次郎氏のアドバイスを得ながら見通しを立て、蜜柑栽培を創始し、蜜柑園の経営のため、明治42年3ヘクタール余りの傾斜地を開墾して、温州蜜柑の苗木を植えて栽培した。その時、共同組合「城南組」を創り、自ら組合長となった。こうして砥部町で初めて温州蜜柑の生産が行なわれるようになり、宮内庁にも献上される程良質の蜜柑作りに成功した。海民スピリッツが実を結んだように思われる。

一方、前述のように絵筆を執って南画(南宗画)の製作にも没頭した。画帳、掛軸、襖絵・屏風絵等が数多く残されている。襖絵は砥

部町重光の圓通寺に、掛軸は西岡家および砥部町役場に保存されている。また、昭和54年12月12日～17日の間、砥部中央公民館に於いて、砥部町に縁のある三人の方の「遺作展」が開かれ、西岡園月の作品も展示された。顔写真に見るように厳格そうな風貌ではあるが、しなやかな画風で、その人柄が偲ばれる。前述の西岡関様の一文によっても種憲氏の横顔が推量されよう。以下に、作品の一部を掲載する。





## 二神 常貞

二神 浩三記

常貞は教育者であった父二神常一(畑中二神)と母茂(伊予吉田藩御家中の末裔)の長男として、当時父の勤務先であった温泉郡味生村(現在松山市)において大正13年3月に生まれ、後に松山市一万に移り、更に昭和5年に温泉郡桑原村樽味(現松山市)に移住した。幼少の頃から絵の才能に恵まれ、小学校時代の担任に二神正興(系譜不明)と云う画才に秀でた先生がおられ、常貞の才能を伸ばされた。



二神常貞 自画像  
(昭和20年頃の作)

愛媛県立美術館友の会の会報「愛美」月報 No. 18 (1977,6,1) 郷土の作家⑩二神常貞の文中に「幼児期より天賦の画才を表わし、更に桑原尋常高等小学校時代の図画は迫真的な写実力を示して、抜群の成績を修めている。——」と表現されている。昭和11年に松山中学に進学し、絵画の教師、松原一(はじめ)先生に師事し、美術部に所属して、写実的ではあるが、力強い、豊かな色彩の水彩画の作品を多く遺している。

昭和17年、京都高等工芸学校図案科に入学、絵画の基本であるデッサンからみっちり研鑽し、油彩の作品に取り掛かった。しかし、昭和19年に病を得て休学し、帰郷したが、徴兵により丸亀連隊に入隊した。20年には召集解除となり松山に帰ってきた。終戦直後の当時は絵の具も画用紙もなく、写真の裏や藁半紙等白い紙さえあれば、鉛筆や木炭でのスケッチに余念がなく数百枚の作品が残っている。また、父とともに畑寺にあった蜜柑山での農作業により食糧を得、絵の資金を得ていたが十分な資金には程遠く廃材を利用してイーゼルを手作りで完成させ、ずっと愛用していた。21年には、松原先生を中心に美術グループ「二虹会」(名は常貞の発案)の創設に参画し、本格的な油絵の制作に没頭した。

当時の愛媛美術工芸展覧会にも度々出品し、昭和21年第1回同展は愛媛新聞社ホールで開催され、愛媛新聞社賞を受賞し、22年にも同賞を受賞し、24年には入選している。現在、愛媛県立美術館には常貞の作品が3点収蔵されている。

樽味の家は幸いにも戦災を免れ、近隣の芸術を志す人々の憩いの場所としても利用され松本須賀(女流画家)、児島凡平(詩人、デッサン画家)、徳本立憲(画家)、鈴木憲二(画家)などの顔があった。その後徳本立憲氏(現在純具象美術協会会長、栃木県に在住)の勧めで、昭和25年7月、絵画の勉強を志し、東京に出た。26年4月に武蔵野美術学校に入学、清水多嘉示にデッサンを学び、当時、東光会所属の新本燦根に絵を見てもらったりもしたが、戦後の東京での生活は容易ではなく、生活を支えるため、進駐軍相手の似顔絵書きなどのアルバイトを余儀なくされた。一方、日展等の展覧会で有名画家の作品にも触れ、少しずつ落ち込んでいった。前述の「愛美」には、「当時の画壇を風靡していたモダニズムの洗礼を受けながらも、生得のアカデミックな描法を掘り下げて新古典主義な画境を形成しようと苦心した。その頃の遺作は一作毎に著しい変化と動揺を見せて画業の苦節と焦燥を示している。」と記されている。

そして、昭和28年8月28日西多摩の美しい景観に溶け入るように29歳の短い一生に自ら幕を引いた。その生涯は実直で、他人には優しく、自らには厳しい性格であり、没後多くの学友、画友によって昭和29年11月伊予鉄ホールにおいて「二神常貞君遺作展」が開かれ、故人の徳を慕っていた。

また、昭和41年4月3日～25日の間、「郷土物故者作品展」が開かれ二神常貞の作品も展示された。さらに昭和61年5月13日～6月22日の間、県立美術館分館(萬翠荘)において遺作展「二神常貞展」が開催され、多くの参観者に感動を与えた。樽味に遺されている作品は数百点に及んでいる。墓地は松山市横谷霊園にあり、父母の霊とともに眠っている。

二神常貞の主な作品の一部を次に掲載する。



静物 油彩 昭和25年作



和服の婦人像  
水彩 昭和23年作



手袋を持つS婦人  
油彩 昭和25年作



読書する少女 油彩 昭和23年作  
(愛媛県立美術館所蔵)



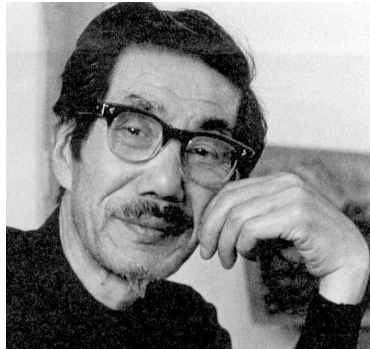
静物 油彩 昭和25年作

## 二神 司朗

牛淵ミュージアム館長 中田和邦さん（篆刻家、画家）記

司朗先生は、美しい人生を送った方でした。

二神家第39代当主としての矜持と威厳を持ちながらも芸術家として、自由人であることを貫いた、そういうふうにあります。



二神司朗

19歳頃より先生のところに入りしていた私は、先生が54歳で美術教師を退職された後の弟子と云うことになります。30年以上先生の身辺にいて、育てて頂いたと思っています。冗談に「君は二神大学を出たのだから、どこの大学出より立派な人になれる。」と言ひ、ニヤニヤと笑っておられました。実にうまく人を褒める方でした。亡くなられてからその偉大さが重くのしかかっています。

先生の偉大さは何処から来るのか、ここではその事に触れてみたいと思います。先生の生涯を辿ると、大きな影響を及ぼした三人の身辺にいた人物がいます。三者というのは二神仲次郎、梨岡素岳、石井柏亭です。

二神仲次郎は、先生の伯父に当たられ、父団四郎の兄君です。仲次郎が早く亡くなられたため、団四郎が跡目を継いだわけですが、仲次郎は、二神家最後の光芒を放った人物だと思います。若くして宇和島に遊学し、開明的な気風の人であったと言います。帰島後はいち早く二神漁業協同組合を創り、鰯網の隆盛の基礎を創りました。記録すべきは、今も二神島の人々に語り継がれている『由利島戦争』のことです。（戦争とは一寸大げさですが、島人はこう呼んでいます。）由利島は二神島の属島として、古くから二神島の領有でした。小さな二神島の生命線を握った島でもあった訳です。

明治半ば、由利島は二神、松前（まさき）、高浜の入会（いりあい）で、松前は萱を茹り、高浜（松山市）は入漁をしていました。ある日、二神島の中村某氏がはげ（ハギ）漁をしていて、高浜の漁船に連れ去



られる事件が起き、怒った二神の人達が由利島の入江に泊まっていた高浜の漁船を急襲し、棒やカケヤ(大きな槌)で舟を打ち壊したり沈めたことです。

この紛争は長引き、裁判になりました。戸長であった仲次郎は奮闘します。裁判では一歩も譲らず島側の主張を通したそうです。水軍の頭としての血が騒いだのでしょうか、裁判所には下駄履きで乗り込んだそうです。

仲次郎は、好事家で、書画を愛し、茶を嗜む風流人でもありました。司朗先生からはこの伯父の話をよく聞かされました。誇りにしていました。

梨岡素岳は、篆刻家で書画をよくしました。日本の大正時代を代表する篆刻家です。関東大震災に遭い、夫人の生地二神島に疎開、昭和 10 年この島で没しました。島で唯一の文化人であった司朗先生の父団四郎との交友が始まり、司朗先生もその影響を受けます。素岳は大きな世界を見てきた人ですから、話が新鮮で、司朗先生は丘の上にある素岳の臥雲山房をよく訪ね、膝を正して話を聞いたそうです。

もう一人は石井柏亭です。柏亭はこの当時、日本洋画界のスターでした。関展や倉敷の美術館活動にも関わった関係で、大阪時代の司朗先生が影響を受けた人です。中之島洋画研究所に通っていた先生は、倉敷大原美術館の開館記念講習会に参加、柏亭に評価され、その後影響を受け、柏亭風の作品を何点か遺しています。20代の先生が一番憧れた画家と云えます。

また、先生がその美に魅せられたものがあります。これも三者で、まずは、古代エトルスク文明の中で花開いた絵画です。セピアと朱を混ぜたような色彩で描かれた壁画です。エトルスクの民は海洋民族で、先生の祖先が海の領主として瀬戸内海を跋扈したことと無関係で無いように思われてなりません。作品の中に、この色を使った多くの少年達が描かれています。エトルスクの絵画様式への思い入れは生涯に亘って続いたようです。先生は一度、この地に立ってみたいと計画していたようですが、身体の不調でこの旅行団には参加出来なかったと聞きます。

次は渡辺崋山です。崋山は画人であり、伊良湖岬のある田原藩士でした。絵も素晴らしいのですが、蛮社の獄に連座した崋山を助けようと奔走した師、松崎慊堂(こうどう)との子弟愛です。先生は崋山を相当研究したようで、いずれ纏めたものにしたい、と言っていました。

最後に、大正ロマンの竹久夢二です。先生の多感な青年期と重な

っています。夢二の詩情は教養の中の青年達を熱狂させました。デカダンスです。厳格そうな先生も少々不良ぼい面を持っていました。晩年の含羞をこめた目の中に、キラツと光るものがありました。

長々と書きました。このように、これらは先生の間人形成や画風を確立する上で重要な役割を果し、生涯の核になる部分に少なからず関与したのではないか、と思われてなりません。いずれ総体にわたっての司朗論が書ければと思う次第です。先生は、多くの名流と交わり、美しきものを見、美味しいものを求めた人でした。ちょっとあればいい、と申され、美しく端座して召し上がっていました。その面影は昨日のように思われます。

## 二神司朗氏略歴

- 1908 (明治14) 年9月21日 二神島で生まれる。
- 1930 (昭和5) 愛媛県師範学校本科1部卒  
(藤田庸夫教授の指導)  
二神尋常高等学小学校勤務
- 1934 (昭和9) 大阪市へ出向。大阪市淀川小学校、  
精華小学校勤務。  
中之島洋画研究所に通い、  
鍋井克之、国枝金三らに師事。
- 1945 (昭和20) 愛媛県へ出向。津和地校勤務。
- 1950 (昭和25) 松山市に転入。堀江小学校2年、  
三津浜中学校6年、津田中学校6年勤務。  
愛媛美術協会展に出品、知事賞受賞。
- 1964 (昭和39) 津田中学退職。二神島に帰島。
- 1988 (昭和63) 愛媛県立美術館で「二神司朗展」開催。  
「二神司朗画集」刊行。
- 1996 (平成8) 自作絵画百十余点を中島町に寄贈。
- 1999 (平成11) 年8月3日 没。享年92才。
- 2000 (平成12) 「アトリエに残された絵  
—二神司朗遺作展」開催。  
於牛渕ミュージアム。

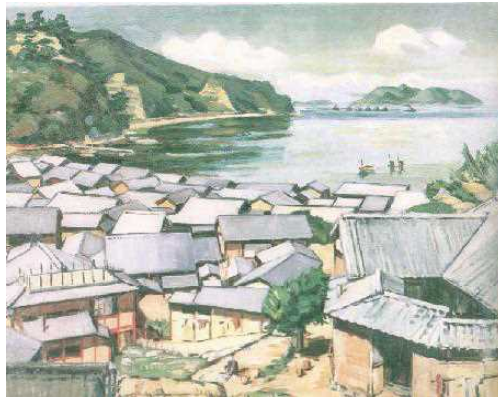


二神島の波止  
油彩 1965



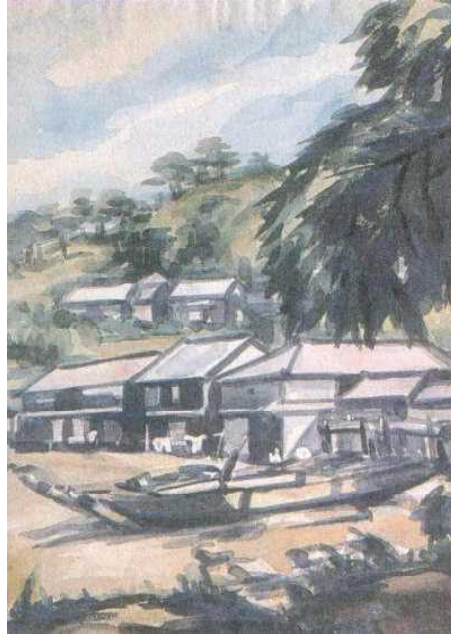
二神島波止場  
水彩 1931年

漁村風景 油彩  
1931年





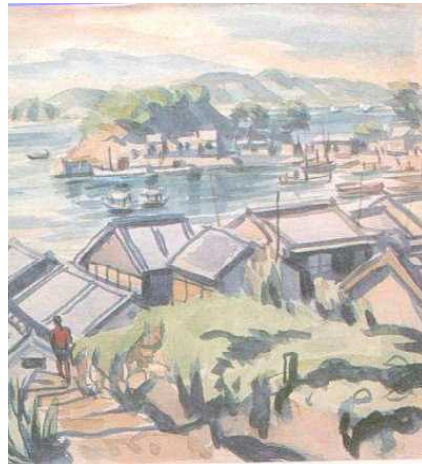
横笛を吹く少年 油彩  
1968年



二神島 水彩 1933年



ザボンとデリシャス 油彩  
1940年



二神島 水彩 1930年



浜辺の少年 油彩 1956年



海浜少年 油彩 1967年



浜辺の少年 油彩 1970年

## 会員さんからの便り

### 南国宮崎よりこんにちは

宮崎市 二神光次



奥様の紗千子さんと宮崎大学退官パーティーにて

二神系譜研究会の皆さんこんにちは。宮崎唯一の会員二神光次(こうじ)です。宮崎は太陽の光に抱かれたところで、明るくさわやかなところ。山あり海あり四季の花ありの風光明媚のところ。その一方、天孫降臨の聖地とも伝えられている歴史と神話の里でもあります。

このような土地柄ですから二神姓も沢山おられるようですが、現在のところ会員は私一人です。二神(二上)神社もありますが四国とは関係ないようです。また、四国からこられた方も沢山住んでおられ、特に商業に携わっている人のほとんどは四国出身者と聞いていますので、そのうち会員も増えると思っています。

今回はじめてこの機関誌に投稿しますので、最初に自己紹介をさせていただきます。私は残念ながら四国に住んだことはございません。東京生まれで小さいとき福岡に移転し、福岡に40年住んでい

ました。九州大学を出て、九州大学応用力学研究所に奉職し、昭和55年に宮崎大学工学部教授として赴任し宮崎へ来ました。以来、宮崎に22年住んでいます。そして、昨年11月30日をもって宮崎大学長を辞任し、同時に大学も退職して、現在は無職です。

10年ぐらい前になりますが、本研究会会長の浩三先生が愛媛大学工学部長をしておられた頃、私も宮崎大学工学部長をしていた関係で会長と親しくなり、父哲五郎が調べていた二神家の系図をお見せしたりしておりました。その後、浩三先生がこの二神系譜研究会を発足させ、いろいろな方面から系譜を調べていただいたわけです。ある日、浩三先生から哲五郎調べの系図に間違いがあること、私方の系図がすべて分かったことの知らせがあり、沢山の貴重な資料を送付していただきました。大変感謝しております。

こうなると父哲五郎にも触れざるを得ませんので簡単に記しておきます。哲五郎は明治32年(1899年)に愛媛県温泉郡余土村余戸で生まれています。大正11年(1922年)に松山高等学校を卒業(第1回生)し、東京帝国大学理学部物理学科に進み、大正14年(1925年)に同大学を卒業しています。その後、九州帝国大学工学部教授となり、昭和38年(1963年)に同大学を退職し、引き続き九州産業大学教授となり昭和47年8月に享年72才で没しました。従って父は松山高等学校を卒業するまで松山に住んでいたこととなります。系図は余戸二神ということになりますが、これについては機関誌「海の民ふたがみ」に二神信助氏が詳しく書いておられます。哲五郎が調べた系図と比較してみますと、会誌第3号33頁の上部に上げてある系図で精一氏の長男静(俊平氏は三男)の長男が哲五郎です。私は哲五郎の次男(長男光郎は夭折)です。

このように父は極めて松山にゆかりが深いのですが、私は数回しか松山に行ったことがありません。それも短期間でしたので、先祖の墓参りもろくにしていません。それでも松山市内で二神タクシーを見たり、工事中のところの二神組の看板を見たりすると故郷へ帰ってきた気がします。父方の親戚が沢山おりますので、機会をみて"里帰り"しようと思っています。

尚、私はこの4月から九州産業大学工学部教授に就任しますので、福岡に転居します。宮崎に会員がいなくなるのが気がかりです。

## 会員さんからの便り

### 「縁あって……………」



愛知県尾張旭市

二神 陽子

二神姓に変わって 11 年になります。結婚前は、山本と云う姓でした。およそ海とは縁のなさそうな姓です。実家の両親は、現在、松山に住んでいますが、父の出身地は島根県松江市で、元々の本籍地は島根県安来市でした。

子供の頃「山本家のご先祖さんは、代々、庄屋だった。」と祖父に聞かされ、うわぁーと思いました。庄屋と云えば、テレビの“水戸黄門”など時代劇に出てくる悪代官と結託して農民から絞れるだけ絞り取る悪いヤツと云うイメージしか浮かばなかったからです。

(祖父は、うちのご先祖さんは、良い庄屋だったと言っていました。)



結婚前に、夫の父はにこにこ笑いながら、「うちの先祖は、海賊です。」と言いました。またまた、うわあーと思いました。生まれこそ、父の最初の赴任地だった松山ですが、その後、父の転勤に伴い全国各地を転々としながら育ったので、二神と云う姓の存在も余り知らず、「神の名を騙る海賊だなんて、大胆不敵、厚かましいなあ。」と思ったのでした。勿論その頃は、二神島の存在も知りませんでした。

山本の祖父は、80才の記念にと言って「山本家の人々」と云う部厚いファイルをくれました。それは、若い頃から自分のルーツを調べることに情熱を持っていた祖父が、寺を訪ね先祖代々の過去帳を調べたり、本家周辺の関わりのあった人物を探し、訪ね聞いた話などを書きまとめたものでした。自分が調べた範囲で先祖の系図などもまとめ、自分の弟妹たち、子供たち、その他親しい身内の者に、印刷して配ってくれたのでした。

「山本家の人々」の中には、私も登場します。たった4行ですが、その最後の行に、平成3年2月10日、二神敬次と結婚、と書かれています。

祖父は「間に合って良かった。」と言いました。亡き父や母、兄弟、ご先祖さま達と、心の中での対話を楽しみながら書き上げたのではないかと思います。祖父は、次男坊でしたが、家に対する思いは深かったようです。数年後、祖父は他界しました。祖先に手向けたいとの一念で書き上げたものは、祖父の思いがたっぷり詰まった遺品となりました。

つい先日、ある講演会で、児童施設の施設長さんのお話を伺う機会がありました。「私どもの施設は、一昔前なら孤児院と呼ばれていたような施設です。といっても現在は、親が居ても、何らかの事情で入所すると云う子供が大半です。不登校でお預かりするお子さんもいます。」

このようなお話で始まった講演会でした。心理学の専門家らしく、1時間半程、私達の心をグッと掴んだお話をされましたが、最後の、質疑応答の中で、こんなことを話されました。「私どもの施設にも、中には諸々の事情で、生まれて直ぐに、全く親

の無い子としてお預かりするお子さんが、数パーセントですがおります。そういう子供達は、成人して施設を出ると、必ず自分の親探しを始めます。守秘義務があるので私達は彼らに何も教えてやることは出来ないのですが、彼らは、ほんの僅かな手がかりを頼りに、親を探そうとします。とても困難なことにも拘らず、殆ど例外なく、皆、親を探すのですよ。」そしてこう続けられました。

「……当たり前だと思います。自分の親を知りたい、ルーツを知りたい、その思いを彼らが抱くのは当然なのです。人間は、自分が何者なのか分からないと、不安で生きていけないのです。」

また、最近、テレビでも、事例は違うのですが、これに似た話をしていました。非夫婦間の体外授精児が、成長して事実を知った時、自分の本当の父や母を探そうとする話です。私が見た映像では、アメリカの大学生の女の子が、精子のドナーであった“父”を探していました。彼女が手に入れた情報は、ドナーの身長、体重、瞳の色、血液型だったように思います。それだけを頼りに、彼女は探していました。幾らインターネットの情報化社会だとはいえ、彼女が“父”に辿り着くのは、かなり厳しく困難なことと思われます。

彼女が“父”探しをする理由は、異母兄弟姉妹の存在を確認しておきたいと云うことでもあります。最も大きな理由は、ただ父がどういう人なのか知りたい、と云うそれだけのことなのです。でも彼女にとって、それはとても重要なことなのです。

自分のルーツを知ると云うことは、自分の存在を確認することでもあり、自分らしく生きて行く上でとても重要なことなのだ、改めて認識しました。

この会の発足当初は、結婚前の、夫や、夫の父の言葉を真に受けて、ほほう、遂に海賊の正体があばかれるかい!と書いていました。失礼をお許し下さい。会から送って頂く資料や調査結果、会報等は、内容も多岐にわたり興味深く充実していると思います。さすが「研究会」と云う組織ならではのしたいと思います。

山本の祖父が生きていたら、夫や私以上にこの会のことに関心を示し、たいしたもんだなあ、これは……と感想を述べるような気がします。

縁あって二神を名乗ることになった私ですが、もしも、法律上、夫婦別姓の選択が可能な時代に結婚をしていたら、おそらく旧姓のままの私であったと思います。私が二神陽子であること、これも運命です。山の者が海の者の所へ参りまして11年。海のものとも山のものともつかぬ子供達が4人います。



海のもの！？ 山のもの！？

## 修理進のその後

(或いは訂正とお詫び)

理事 二神信也

昨年の玖珠町での総会に参加しました。その折、会報第二号「二神修理進について」で、私が書いた二神修理進についての文章の中で間違った記述があることを教えていただきました。以下、玖珠町での総会で頂いた、福川一徳氏による「伊予二神氏と二神文書」と「国史大辞典」を参照します。

それによりますと、修理進は、関ヶ原以後、加藤嘉明に仕えています。彼の子孫は豊後の森（玖珠）の森藩（久留島（来島）氏）に仕えていたので、私はてっきり修理進は久留島氏について玖珠にいったものだとばかり思っていました。

今年築城四百年を数える松山城を建てた加藤嘉明は、文禄四年（1595）七月に伊予松前（真崎）に来ました。始め六万石でしたが、関ヶ原での軍功により二十万石に加増されました。以後寛永四年（1627）に会津に転封されるまでの間に石手川の治水や松山城築城などを行ったとあります。（国史大辞典）（二神氏と縁が深い風早も、転封までに嘉明の領地になりました。）

嘉明は秀吉に仕えていた頃に淡路志智城主（天正十四年）を務めるなど、秀吉の船手の将として活躍していました。朝鮮の役でも船奉行として出陣していますし四国征伐、九州征伐にも参加しました。

当然、修理進も久留島氏に従ってこれらの合戦で戦ったでしょうし、この頃来島氏とともに修理進は、鹿島や来島、風早にいました。その関係で修理進と嘉明とは、面識があったのかも知れません。

関ヶ原以後といたしますと、丁度嘉明が二十万石の大名になった頃のことです。当然二十万石の大名に相応しいだけの家臣団を作り上げる必要があったでしょう。伊予の国で水軍の将として活躍していた修理進などは格好の人材だったのだらうと思います。（元海賊の二神家を野放しにしておく物騒だから、家臣団に組み込んだほうが賢いと思ったのかもしれませんが）

同じく福川一徳氏による「伊予二神氏と二神文書」によりますと、修理進の息子七大夫は島原の乱に出陣、七十歳で討死しています。としますと、修理進は関ヶ原の頃五十歳前後だったのではと思います。

彼の息子の七大夫は早くから黒田氏に仕え、その後、修理進から数えて三代目の嘉林の代になってから豊後の森の森藩に招かれました（その後、召し放ち（所謂リストラ）になりました）。

前回主に参照した「南海治乱記」の著者香西成資は福岡藩で兵学者として仕えていました。その関係で二神七大夫に話を聞く機会もあり、著書の中で修理進にも触れたのだと思います。

最後に前回の私の早とちりをお詫び申し上げます。

# 尋ね人

ご存じの方、心当たりのある方は事務局までお知らせ下さい。

??

**江戸後期の「二神仙次郎」、天保12年生まれの「二神銀蔵」についてご存知の事がありましたらお教え頂ければ幸いです。**

私の父方の曾々祖父（祖母の祖父）の名が「二神銀蔵」と言います。（銀蔵の父は二神仙次郎といます。銀蔵は天保12年仙次郎の四男として生まれま した。）本籍は現在取れる最古のものが明治26年頃のものでその頃は東京府浅草区田町に住んでいたようです。親戚で二神銀蔵を知っていると思われる人 は既にないないようで、お墓がどこにあるかも分かりません。

銀蔵さんは何度も転籍をしています。銀蔵さん以外の除籍謄本の情報と合わせて分かったのは浅草区田町（明治26年頃）→（この間不明）→神田区東松下町（明治37年まで）→小石川区小石川柳町（明治41年2月まで）→小石川区小石川指ヶ谷町（明治41年11月まで）→小石川区小石川柳町（明治43年まで）→四谷区船町（昭和32年認定死亡で除籍）と転籍していることです。最終の除籍謄本では「家督相続事項及母名原戸籍ニ依リ知ルコト能ハサルニ付記載省略」と記載されているため、どこで生まれたか、仙次郎（銀蔵の父）がいつ亡くなったのかは原戸籍からは読めないのだと思います。銀蔵さん自身も戦後の混乱期に亡くなったのか、除籍謄本では昭和32年に「年月日及び場所不詳許可を得て除籍」とされています。このような状況ですのでお墓・家紋も分かりません。

**情報をお持ちの方は事務局まで御連絡下さい。**



**二神啓さんから家紋についての問い合わせです。**

啓さんは愛媛県越智郡伯方島のご出身です。

伯方島は「しまなみ海道」と愛媛県が売り出しに懸命の地で、尾道と愛媛県の今治にまたがる「芸予諸島」の一つになります。

家紋は「○の中に矢が二本重なっている」ものとの事で同じ家紋をお持ちの方とか、ご存じの方が居られましたら御連絡を下さい

**情報をお持ちの方は事務局まで御連絡下さい。**

**八王子の溝田孝一さんがご先祖の事について、  
心当たりの方を探して居られます。**

溝田孝一氏

〒192-0372

東京都八王子市下柚木2-19-5

0456-76-5546

私は先祖が暮らしていた地を尋ねながら、その地の図書館にも立ち寄り私の先祖を探しておりますが、残念ながら力量不足で一部分のみ現在でも文書で確認されておられません。

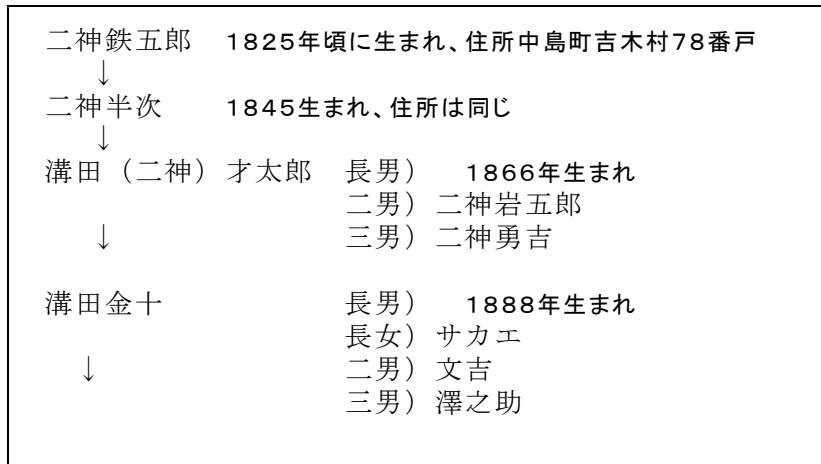
その部分が確認されればほぼ鎌足からのDNAが解明されます。この広報誌をご覧の二神様で私の先祖を知っているという方がおられましたら、どうか下記までご一報下さればと存じます。

私の先祖は**中島町吉木**の出身です。除籍謄本を取れるところまで全部取り出して見ました。ただ残念ですが役所の方でもほぼ解明できるところまでは話して下さいますが、その文書を発行して頂けないので解明出来ないのです。

吉木で尋ねたらと思われるでしょうが、明治から昭和にかけて吉木では生活できなくて成人になれば日本全土、アメリカ、南アメリカ、台湾・中国などに散らばった経緯があり、私の祖父、金十、明治21年生まれも成人に達した大正2年結婚し、長女1歳、両親、本人の兄弟を連れて台湾、上海で生活をし、父の兄弟姉妹は長女を除いて全員台湾、上海育ち、当時は近代的な英国統治下で金銭的には不自由無い暮らしをしていたという話を親族に聞かされて私は育ちました。

大正3年から昭和20年まで31年間、明治生まれの金十は吉木に帰らず多角経営に成功した上海で10人の子供(大正から昭和の初め生まれ)に今後を託してこの世を去りました。その後、不幸なことに戦争に負け、財産は中国に没収され、10人の家族はずでに妻、夫、子供がおり、混乱の最中何とか福岡に上陸することができました。

従って、吉木の方々とは私の代まですっかりご無沙汰している次第です。私も大学卒業と同時にアメリカに仕事を求めて旅立ち21年間を過ごして13年前に帰国しましたのでなお更困難になっております。



**尼崎にお住まいの岡本さんが、  
お父さん・おじいさん・おばさん  
とお墓の情報を探して居られます。**

父の名は、二神一武、大正元年10月26日生まれ。  
本籍は住民票では東京都千代田区内神田3丁目7番地1です。生前、父は神田多町7番地?とも記しておりました。職業は社交ダンスの教師です。

戦前は、中国の上海・青島のダンスホールに勤め、戦中は軍隊に徴収され、戦後は東京・大阪のダンスホールに勤めております。昭和22~23年頃、神戸の福原で(国際ダンスホール)を自営しております。

妹(文枝)は、昭和10年に18歳で亡くなっております。大坂の蓮華寺には、現在文枝の墓はなく、住職も分からないとの事でした。

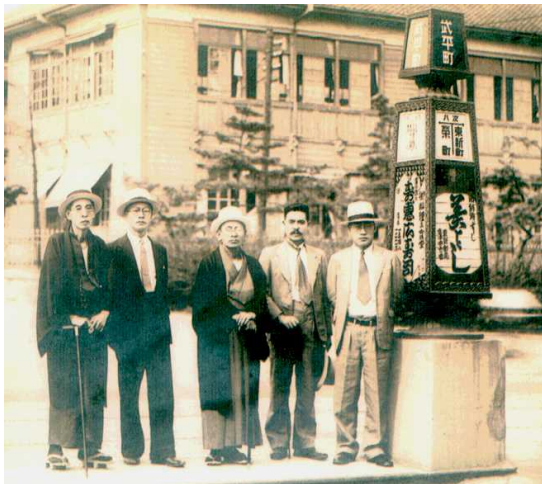
祖父の名は、二神鎗一 昭和12年撮影の5人組の写真、1番左側 私は祖父には一度もあつた事もなければ、いつ逝去したかも知りません。父の生前に、もっと聞いておけばと、悔やまれます。ちなみに、祖祖父の名は、六左衛門?らしいです。



父上



家紋は二つ巴  
卒塔婆に妙法蓮華教と書か  
れていて日蓮宗と思われる。



武平町と書かれていて名古屋市らしい？  
左側がお祖父さん。



文枝さん  
チシロ写真館 撮影  
(大坂今里町新橋通り)

## 役員をつぶやき ☆ ☆ ☆

### 「手提げ提灯」

副会長 二神 俊一



先日、納戸の整理をしていたワイフが珍しいものを見つけてきた。それは、丁度20年前の新聞にくるんだ「手提げ提灯」であった。20年前に、6年間の東京勤務から、松山(本店)へ転勤で帰ってきて、そのタイミングで家を建て替えようということになり、築後約50年余り経った古い家の荷物を片付け、その時に新聞にくるんで保存したものだ。

普通の大きさの提灯(高張り提灯と呼ぶらしい)は毎年、秋祭りの時に玄関前に吊るすため馴染みがあったが、この手提げ提灯(ぶら提灯と呼ぶらしい)は日ごろ目にしていないので珍しかった。なんだか、宝物を探し当てたようで妙にうれしかった。

この提灯には、二神の家紋(宝珠輪に右三つ巴——この家紋については、いずれ、系譜家紋紹介で触れたいと思います)が前と後ろに表示されており、「萬」という字があり、これは、多分、父の名前の「萬次郎」からとったものであろう。提灯の高さは約30cm、直径は約23cmくらいである。

いつ頃までこのような提灯をぶら下げて、暗い夜道を歩いていたのであろうか？昔は、もちろん、懐中電灯が無かった頃は必需品であったろうが、その後も乾電池が貴重品であったために普段は提灯をよく使っていたのであろうか？いづれにしても、うす茶色で、ローソクの溶けたあとがこびりついている、年季の入った提灯を前にして、一昔前にタイムスリップした感じである。

現在は夜も結構明るいから、懐中電灯そのものもあまり使わないが、昔は、提灯をよく使ったのであろう。その時、提灯に「家紋」が表示されているから、離れた所からでも、提灯の持ち主が識別できるから便利でもあったろう。

珍しい提灯を発見し、また、提灯に表示されている「家紋」をみて、改めて、私達のこの「二神系譜研究会」の活動の大切さを痛感した。

# 役員をつぶやき ☆ ☆ ☆

## 「笑う門には福が来る」

理事 二神 宏介（関西・中部支部会監事）



豊後森の研修会場にて

### 二神姓は得な姓？

皆さんは名札や、名刺を出してふたがみさんと呼んでもらっていますか？

愛媛以外の県では、たいてい、にかみさん、にしんさんでふたがみさん、と読める方は少数です。

私は営業マンの時名刺を出す際、笑顔でふたがみです、えべっさん、と大黒さんの二つの神さまがいます福の神です。金は持ってきまへんが福を持ってきました。と自己紹介していました。えべっさんの「笑」は大阪今宮戎神社の津江明宏宮司さんによると、笑いと神と人とを繋ぐ大切な行為でした。巫女が鈴をもって踊る姿が笑うと云う字になったそうです。笑顔のふたがみさん（えべっさん大黒さん）は福の神ですなー(^ O ^)(^ O ^)

笑顔で接すれば、笑顔がかえってきます。話題も広がります。

二神姓って得やなー

全国の二神さん笑って福を配りまひよ。  
暗い世の中二神さんで明るくしまへんか！！

## 二神島

2000年9月9日、夢にまで見た、幻の島、神々の住む、先祖の島に行きました。

喧騒の都会大阪から、二神島に着いたときの感動は忘れられまへん。悠久の時間が流れているような、母の胎内にいるような、なんとも云えん安らぎを覚えました。いっぺんにストレスが消えていくのが、ようわかりました。

やはりDNAが喜びを教えてくれたんかいなー？と二神島の姿は、二つの山からなる島で二つとも御神体で、やはり戎さん、大黒さんが祭られてました。又、安養寺で拝見した大般若経はまさしく670年前にタイムスリップしたような、先祖の直筆を触らせてもらい楽しい一時でおました。

今年も又、釣り師、浩三会長にお願いして、一日の一んびりと魚釣りでも楽しんで新鮮なお魚をようけ食べる贅沢をしてみたいとおもってます。

二神島ってええとこやでー

わいもまだ62歳、100歳までまだ38年ありまんがな、  
これからや！！楽しむでー

元氣の出る友達を持ち、

元氣の出る所に行き、

元氣の出る話しをよく聞こう、とおもってます。

「二神さん集まれ」元気に楽しく

二神系譜研究会を発展させて行きまひよ。

ほな、おおきに

追記 2001年関西・中部支部会を開催した際、紀伊国屋制作『二神島』ビデオを放映しました。日程の都合で参加されなかった方も多く、改めて今年度の関西・中部支部会で紀伊国屋制作『二神島』ビデオを放映します。

二神島ってええとこでっせ、一回見とくなはれ

関西・中部支部会会員の皆様の参加を楽しみにしています。

## 役員をつぶやき ☆ ☆ ☆



### 「皆様と共に考えたい」

理事 二神 末次三

浩三会長様から、会報の役員をつぶやきに、なにか一文投稿をと依頼をお受けし、テーマが決まっていないので何をお話するのが良いのか、浅学非才の身では考えも付きかね、暫くぼんやりしていました。

直接、二神系譜研究会に関係するような事ではないのですが、小泉内閣、ホームページが始まってより、国政、行政に関する意見等を、インターネットを介して直言出来る機会が得られた事で、私は特に、教育改革に関して、可也、辛辣に反省を求めて参りました。

私の小泉マガジン宛、国政に関する主張は下記の通りでした。

① 大東亜戦争に敗れた(敗戦) わが国は、無条件降伏(一切の条件を出さず、相手側の言われるまま、従う事)を受け入れる事で戦後処理を始めたと思います。

② 今日の繁栄と自由が得られた事は、それなりに有り難い事なのですが、反比例して基本的には人間の倫理、道徳、教育、教養は日々の新聞、TV等で見られる如く、世紀末を思わせるような乱れきった世相となっているように思われます。

③ 平和条約が締結され、独立行政が施行されたのですから、わが国本来の美德とされる教育基本法には、幼少期から少年時代に、倫理、道徳、修身(身を修める術)がありました、明治の教育勅語の中身には、人間として不変の大原則が示されています。

日教組あたりが、戦前の軍国主義に戻るとして、猛反発されているようだが、現状のような狂った世相を、特に少年少女期の成熟前、多感期に人格形成に果たしてどこまで先生として、師として、指導者として取り組まれているか甚だ疑問である。

教育の崩壊、家庭の崩壊は、とりもなおさず人間の崩壊、人格の崩壊、国家、即ち、わが国、日本の衰退、崩壊、滅亡への道に通ずる、戦争よりも逆に恐ろしい現象だと言いたい。

(注) 今年の年初に、現役時代大変お世話になったある中堅、技術専門会社の会長様から頂いたお年賀状に、同じように教育と人格形成に関し、国を愁う切実な論評と、ご提案を頂戴し、全く其の通りと痛く感じていたので、この機会にご披露させていただきます。

### (以下原文の通り)

21世紀に入ってからこの1年間、わが国は痩せ細りました。このままではこの国は大地を槌でうつほど確実に亡んで行き、子々孫々は悲惨な生活に泣くことになりましょう。そこで、一つしかないこの祖国をもう一度世界に冠たる一等国に甦らせる手段はもう残されていないのか？ 考えてみました。あったようです！ 只一つだけ。但し、其の効果が現われるは30年先です、今すぐに始めたとしても。

イチロウ選手は、父親が幼児の頃から素質を見抜き、徹底した英才教育を施したから世界のイチロウが生まれたのです。音楽家の家庭から世界的な音楽家が生まれます。環境に色彩の溢れたイタリアからファッションデザイナーが輩出します。

物心がつき始める幼児期にはどの子供も吸い取り紙がインキを吸い取るように知識を吸収しますからこの数年間が一番大切な教育期間なのです。アメリカ人と英語だけでお遊びさせれば、成人した全ての日本人は巻き舌で生粋のアメリカ語を喋るようになるかも知れません。この時期に物事の是非善悪を教え込めば、昨今の新聞紙上を賑やかすような若者たちも影を消すでしょう。

そこで、**私の提案** は：

只今の義務教育を3年繰り上げて、3歳児からスタートして6：3制として11歳で終了する。8歳までに本人達の素質を見極め、11歳までに凡その人生進路を決め、教育終了後は各人が最も適切で最も希望する進路の専門家に手渡して後の指導を託す。

もしも、この教育制度が手際よく運営されるなら、30年先のこの国からは、最も多数の優れた人材や、天才達が輩出すると思うのですが、如何なものでしょうか？

2002年 元旦

著者：池内 博 様 〒659-0074 芦屋市平田町 2-8-703

ご紹介：二神 末次三 〒874-0848 別府市大畑町18-3



# 役員をつぶやき ☆ ☆ ☆

## 私と城辺

理事 二神久藏



1月21日事務局長の英臣さんより、会報誌に何か書け、締め切りは31日だと受電、突然のことで慌てふためきました。と申しますのは翌22日から一週間中国へ旅立つことになっていたのです。今回はお断り致して次回にと思いましたが次回に逃れても粗文には変わりなく、恥をさらすことに成りました。

父の出身地、城辺に付いては会報2号にて藤田儲三氏が詳しく述べられてますので、重複する事も有りますが、私が父の出身地城辺に居住したのは浪人時代の1年余りで本籍と墓地が在る程度しか記憶に有りませんでした。他の姉妹弟は城辺、御荘の中学高校へ通うて居ましたが、私だけが違ったので友達の一人も無く、町の中心に有る諏訪公園に、二神深藏の建碑と息子の駿吉の等身大の銅像が有るので、田舎だなあーおおげさなあーと、ひと夏日陰を求めて本を枕に昼寝をしたぐらいの記憶で疎開前の豊中市へきました。

父は小学校までと戦後暫く城辺に住んで居たので幼馴染も多く、その後上阪し私と住む様になっても城辺を懐かしがり、私に色々話をしましたが、私は未だ若かったので田舎が嫌いで無関心で聞き流しておりました。今にして想へばきちんと聴いておくべきだったと想います。

私の先祖に関して少し関心を持ち始めたのは、私の結婚披露宴で父の兄がイギリスの軍艦で、エリザベス女王の兄君で、当時未だ皇太子だったエドワード8世（後のウィンザー公）が大阪港に入港した折、

通訳をした事を出席者の誰かが聞きだし、叔父が頼まれたので仕方が無かったと照れながら話して居たのを、私が帰って父にいきさつを聞いた時からです。父から結婚したら二神の事も知らぬでは通らぬ、少しは知っておけと言われて、知識として教えてもらった。

父からの話では、先祖は中国地方の豊田で二神島へ逃げてきた。二神島で海賊をしていたが、そこも追はれ海伝いに城辺の方へ流れて来た。二神深藏が長州征伐を伊達家へ願い出て上洛目指したが、(蛤御門焼き討ち事件)八幡浜辺りで長州が勝ち引き返したとか、その深藏が井戸堀代議士で、金が無く何時も息子の駿吉にくっついて歩いていた事。私の祖父、一治は医者で子供の頃浦方へ(西海町辺り)代官代として烏帽子を被り赤い刀を差し年貢の取立てに行ったら、漁師に戸板に乗せられ、みなの前で口上を述べると皆が、ハァーと跪いたので、おかしくて、笑い出しそうになったとか、その一治が大阪で遊学中、城辺の親元から金が無い、もう学費は送れぬ、早く医者免許を取って帰って来い、と言われて困ったとか、緒方塾では襟に蚤、虱が付き、どの塾生もボリボリ搔いていたとか、夜、豆腐一丁で酒を飲むのが、只1つの楽しみだった事とか。何とか免状をもらい城辺で温故堂を開業するが、切羽詰った人が、あそこに行けば金を取らぬと、汚い身なりの患者が多く父達子供は汚い医者は、厭だと誰も継がなかったとの事。又、高知から駕籠と船で迎いが来て1日掛りで往診を頼まれたとか、城辺小学校の石の裏門は一治が寄付をした、それを潜って帰ったとか、のんびりした話を聴かされました。

城辺御荘辺りで陶器が昔焼かれていたが、良い物は古伊万里に匹敵するとか、江戸時代、その雑器が京、大阪間のくらわんか船で使われ、枚方辺りに多く沈んでいる筈だとか、その御荘焼の欠片が石炭箱に3つ程有ったが、邪魔だから、ほれ、ほれ、と、ほかしたのは父に申し訳ない気持ちです。どうやら価値が有るらしいと後で解ったのです。城辺の事を書こうと思っても、城辺とは父から見た城辺で、私から見た城辺は未だ出来あがっておりません。父からの話を断片的に並べました。申し訳なく存じます。最後になりましたが、元祖の二神島は松山藩の政治犯の流人の島、ぐらいの知識しか有りませんでした。

系譜研究会に誘われて初めて、先祖、を再認識致し、又、格闘致して居ります。誰かが正しく次ぎへ伝えなければ、伝承で終わり消え去るのみ、と、痛感する次第です。今後共宜しくお願い申し上げます。

# 役員をつぶやき ☆ ☆ ☆

## 世界の京都の二神町は ！！

理事 二神 成幸

拝啓 いつもお世話になっております。ご健勝の事とお喜び致します。さて関西・中部支部総会でご依頼を受けた「二神町」の探訪記ですが、下記のような事で、提出をためらっておりました。適当にお扱い下さればと思ひまして  
・・・ 敬具

---

昨年の関西・中部支部総会の時、機関紙第3号に紹介された「世界の京都の二神町」について探訪し、報告書を書くよう依頼された。

長年住んでいる者として、自分の住む町に「二神町」が有ることに、ある種の驚きと感激を覚えて、探訪に出掛けた。それは1月半ば、まるで桜の開花を思わせるあたたかい午後であった。

「京都市上京区今出川通り河原町上る一筋目」そこが、第3号に記されている「二神町」が有る場所であった。大ざっぱに言うと、そこは、鴨川の西側で、下賀茂神社の西南にあたる小さな一角であった。近くの交番で住宅地図

を拝見すると、細長い商店街の一角、約30余軒の店舗を含む地域に、二神町という名がついていた。

町名のいわれを聴く前にそのすべてを回ってみた。一部に一般住宅があるものの、大部分は商店で、それも現代風の新しい店ばかり。老舗といえそうな店舗は一軒も見当たらず、さればという訳で、比較的古そうなお豆腐屋さんの店に顔を出し、オカミサンに問いかけた。「実は・・・で二神町のイワレを調べているのですが、何でもいい命名の由来みたいなものを・・・」というと、そのオカミサン「ポカンとしたまま曰く」この町の名は、ニシン町というて二神（ふたがみ）町とはいわんののですが・・・」！？！・・・」何をかいわんや！

されば「二神町」と書いてニシン町と云うのは何故か？と思って近所に点在する寺を数カ所尋ねて聴きまくった。駄目だった。

どの寺でも解らない。・・・さればこの探訪記の跡始末はどうするか家に帰って、その件を家内に話すと、家内曰く、「東北に二つの神社が有る（上賀茂神社・下賀茂神社）ので、その辺の人は「二神町というのは恐れ多くて、二神町という名をニシン町と言ったのではないか？」

ムベナルカナ・ムベナルカナ・・・というわけで、一件落着。

探訪お粗末説                      京都市    二神成幸

## 会報の編集について。

常任理事 二神 重則

会報「海の民ふたがみ」は今回の発行で4号となります。月に何度か行く松山市の図書館に、郷土関係の棚があります。その棚の大部分の本の背表紙には色が付いていて、全体がくすんだ様になっています。その様な中に我らが「海の民ふたがみ」が3冊並んで置いてあります。決して大きな本ではないのですが、白色の背表紙が効いています。この会報が10号、20号と並んでゆく様を想像しながら第4号の編集にかかっています。(現在、松山市立図書館・愛媛県立図書館・子規記念博物館に会報は寄贈されています。寄贈を希望される図書館などありましたらお知らせ下さい。)

今回は、皆様から原稿の送り方などの質問を受けることがありますので、頂きました原稿の冊子化される手順と、原稿の書き方や送り方についてのお願いを書きたいと思っています。

### 原稿のレイアウトまでの手順

送って頂ける原稿には、**手書きの文書**、**FAX**(ファックス)で届くもの、ワープロかパソコンを使い**印刷されたもの**、**FDD**(フロッピーディスク)やその他のメディア、**インターネットメール**等があります。これらの原稿は全て一度テキストファイルに変換します。テキストファイルとはワープロで作られた文章を想像頂ければ良いのですが、その文字には色々な情報が入っています。色・大きさ・フォントと呼ばれる字体・罫線やその他の装飾、それらを一才省いた、文字情報のみのものです。

**手書きの原稿**や**FAX**で送られてくる原稿は、最初の手順として人手によるパソコンへの文字入力が必要となります。パソコンのワープロ

ロソフトかエディター（ワープロソフトの印刷部分を無くした様なソフトで、プログラムの作成や文章の編集に使います。）で打ち込みテキストファイル化します。

**ワープロやパソコンを使い印刷されたもの**は、OCRというソフトを使いテキストファイル化します。OCRは広辞苑では「(optical character reader) 光学的文字読取装置。印刷されあるいは手書きされた文字の形を感光素子を用いて電気信号に変えることによって、自動的に文字を識別する装置。」と書かれています。簡単には郵便局で郵便番号の読み取りをする機械を想像してください。あの原理を利用したもので印刷された原稿を読みとります。しかし、全てが正しく読み取れるわけではありません、原稿の紙の質や、印字の汚れ具合、フォントなどに依りますが95～98%程度正しく変換されます。その変換された文章を、送られてきた用紙と見比べまして訂正してゆきます。

**FDD(フロッピーディスク)やその他のメディア**でワープロ専用機により作成されたものは、リッチテキストコンバーターの様なソフトを使いDOS/V機で処理できるようにメディアの変換をします。このソフトによって大方のワープロ専用機のFDDの文書がテキストファイル化出来ます。この様にして変換された文字情報はOCRの様に読み取り間違いなどはありません。

パソコンの中には印刷屋さんやお医者さんの方々がよく使用されているマッキントッシュのパソコンがあります。この場合も同様のメディア変換が必要です。

一般的なDOS/V機で作られた文書やインターネットメールで送られてくる文章は上記しました手続きの必要がなく、一番手間が掛からず間違いの少ない助かる方法です。それらの機器で作られましたワープロの原稿は、その使っているソフトでテキストファイルでの書き込・保存をしまして、そのファイルを使用します。インターネットメールはその作業の必要がありません。

## 印刷までの手順

印刷屋さんには出来る限り安く上げてもらう為に泣いてもらっていますが、今私が採用している方法を説明しておきます。印刷屋さん指定の大きさ(115\*170mm)に原稿や写真・図を配置して印刷したものと、使っている写真のプリントを持参します。印刷屋さんでは文字と図はそのまま使い、写真は別にファイルとして取り込み印刷の際に原稿の中の写真の大きさに印刷します。その様にすると写真が美しくなります。

皆様方にお届けしているものに「海の民ふたがみ」と「二神系譜研究会」の速報があります。速報はその様な方法でなく、ワープロソフトで印字したものをそのまま印刷しています。速報と会報の写真を比べて頂けると、写真の質の違いがお分かり頂けるかと思えます。

次いで、印刷屋さん持って行く為に指定の大きさ(115\*170mm)にレイアウトしなければなりません、その方法を書いてゆきます。

送られてくる原稿の文字数や写真・図の数もそれぞれ異なっています。また、見開きのページから始まり見開きのページで終わる様にページ数は偶数を原則にしています。連続しています連載や「役員をつぶやき」などのタイトルは決まった大きさやデザインにしています。主要な文字はMS明朝体の10.5ポイントを使い、強調したい文字にはその他のフォントや文字飾りを使用します。

現在、印刷屋さんにとって行く為の印刷には、A4(210\*297mm)の高精度印刷の用紙を使用し余白を取って指定の大きさ(115\*170mm)にしています。偶数のページにする為、一行の文字数や1ページあたりの行数を調整したり、写真や図の大きさを変えたりします。会報には字がぎっしりと詰まったものや、たっぷり余裕のある印字がされているものがあると思いますが、それはその様な理由からです。

タイトルを付け、写真や図を配置し、文字飾り(字形や大きさ、線など)を付けます。その折りに原稿と見比べつつ作成者の意図を図り作成します。

とりあえず出来上がりしましたら、執筆者の方にこれで良いかどうか見て頂く為にお送りしまして、変更点をご指摘頂き、もう1度編集し、印刷屋さんを持って行く手順になっています。

### **会報編集者からのお願い。**

以上書きました様な手順で印刷され皆様のお手元に届く様になっています。いつも思うことですが、原稿を書いて頂く方の意図が正しく反映されているか不安が残っています。そこで、ご自身でレイアウトし印字されたものをお送り頂けると助かりますので、その方法をお知らせします。

印刷にはA4(210\*297mm)の高精度印刷の用紙を使用し、印刷すべき大きさ(115\*170mm)に印字して下さい。連載ものなどで決まったタイトルの原稿には、その作成方法をお知らせしますので連絡下さい。主要な文字はMS明朝体の10.5ポイントを使って、強調したい文字の文字飾は自由です。印字は特にカラー印刷でなくて結構です。上記しました様に写真や図は別に添付してください。なお印刷は2部作成し折らずに送付下さい。

最近デジタルカメラをご使用の方が多く居られます。プリントされた写真でなく画像としてお送り頂ける場合は、100万画素程度のjpgなどでお願いします。我が家のパソコンは性能的にかなり劣っています。また、インターネットの環境も64kですので、大きな画像やファイルをメールで受け取るには困難が伴います。出来ましたら、FDDなどで郵送いただけますようお願いします。

会報の発行を始めて2年が経ちました、今回の第4号は皆様にはどの様に読んで頂けるのでしょうか。これが終わると次の第5号の準備が始まります。皆様が自分の足で調べられた自らの先祖探しのことなど、またその折りの苦労話や、面白かったこと、嬉しかったことなど、お寄せ下さい、原稿を募集しています。